大正十四年九月十日發行（毎月一回一日發行）

婦人新報

第三百三十一號

我らの目標

世界の

平和・純潔・禁酒

九月號
（矢島楫子記念號）

基督教婦人矯風會

ライオン歯磨

新製 丸罐入 粉製

体裁が優美で
現代的。
容量が豊富で
經濟的。
且つ香氣の保
存が完全です
から
御家庭用としても、
御旅行用としても、
至極御重寶で
御座います。

粉製丸罐入



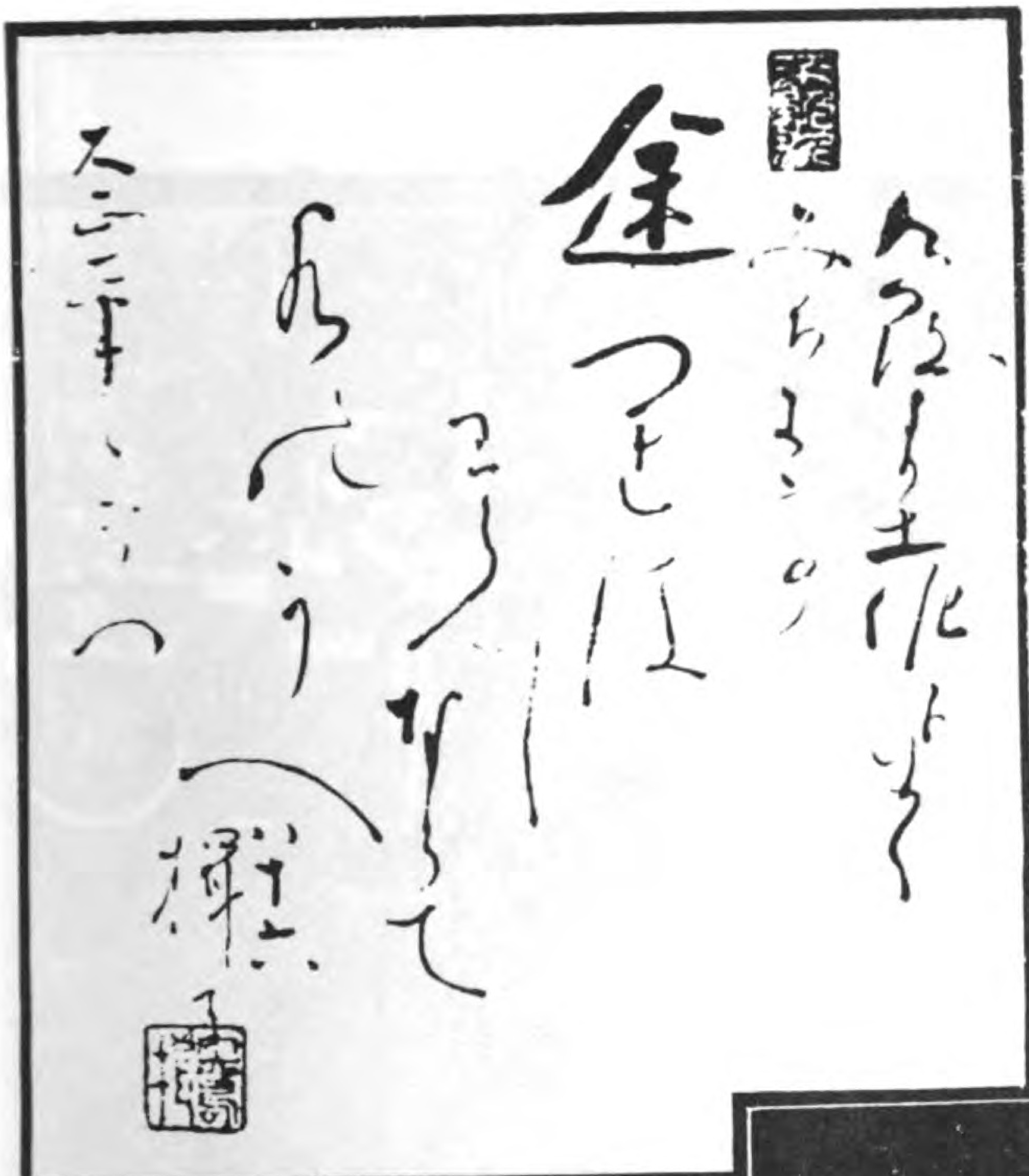
定價金十六錢



最後の御誕生日に　四月廿四日の先生のお誕生日、それも今からみれば今年が最後のお祝ひでした。これは今年九十三のお祝ひ日に快く寫されたものでした。

遺墨

大正七・八年頃、先生は盛んに筆を採られたものでした、この色紙の一句、これは、今は珍しい先生の遺墨となりました。





ある朝

大正六年の秋、東京全市は恐ろしい暴風雨の襲來をうけて、本所深川の方面は浸水し、津波の爲に未曾有の慘狀を呈しました。當時、矯風會は早速、全國支部より盛んに集つて來た衣服類や慰問品を以て困窮せる同胞救助の仕事に取りかゝりました。矢島先生は守屋姉と共に北海道よりの歸途津輕海峽での暴風雨に遭遇されて而も平然たるものだつたとのことでした。この寫眞はある朝早く守屋姉が先生のお部屋に行つて見ると、先生はとつくの昔起きて大廣間の、天井につかへるまでぎつしり積みこまれたこも包みの中で御覽の通りの容子で慰問品の整理をして居られました。先生八十五歳の秋でした。



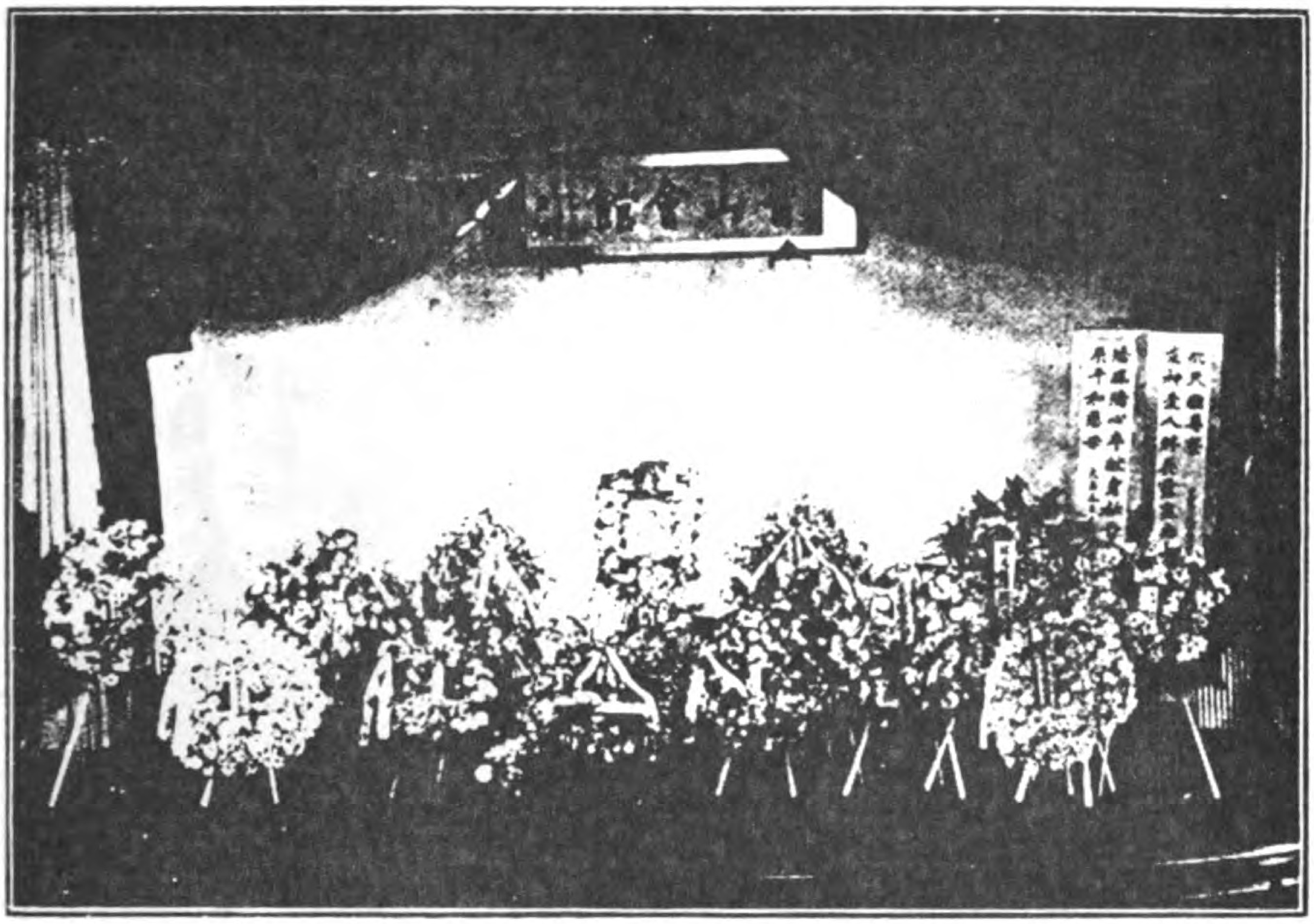
ツルー夫人

矢島先生の過去五十年の精進の生活にツルー夫人は忘れることの出来ない力強い人格であります。先生が殁後迄枕邊の壁間に掲げて懐まれた方であります。

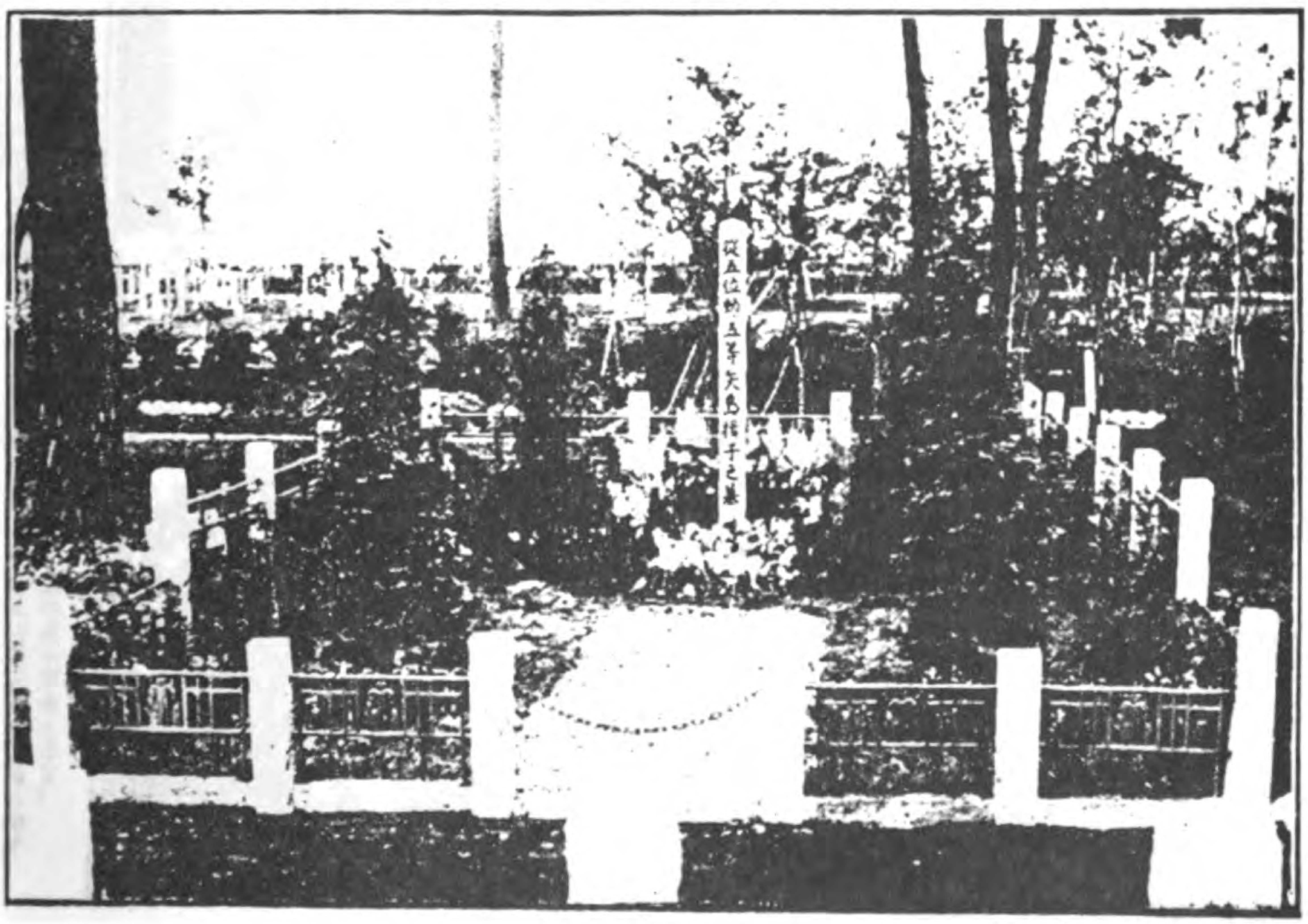


長き旅路に

大正十四年六月十七日午後四時、告別式を終へて。傍らに立てるは會頭小崎千代子女史、靈前に飾られたるは　皇后陛下より御下賜の品々であります。



上圖は六月廿六日午後二時から青山會館で舉行された葬式壇上の光景で、式場は三千の人々で滿たされました。壇上には、去る四月のお誕生日の最後のお寫眞を中央に、中華民國留日基督教信徒から捧げられた弔詞、東京聯合婦人會、婦選獲得同盟、東京日日新聞社、大阪毎日新聞社、日本基督教聯盟、基督教女子青年會、女子學院、香蘭女學校その他からの清らかな花輪が飾られました。
下圖は赤松の林に緑濃き多摩墓地の一所に矢島先生の墳墓は定められました。砂塵の都を郊外へと遠く離れたところであります。



竹崎順子

大正十二年四月發行

第十版

四六判・折革式天金製箱入・九百頁三枚短冊石版七度刷・日記拔萃二色刷肥後略圖石版壹葉・特撮寫眞十三葉

定價四圓五十錢
送料書留二十七錢

德富健次郎述

「新春」の「私の松」に、「私は曾て私を愛してくれた伯母の事を書いて、此伯母が女學校の校長として生徒の庭に散らす紙屑をよく自身で拾ひ拾ひした事から、「私自身も此刀自に拾はれた屑の一つだ」と云ふたことがある」と書いた其「伯母」は、此竹崎順子」である

伯母の遺囑によつて著者が書いた「竹崎順子」は、典型的婦人竹崎順子を中心として、其姉兄達、其妹なる著者の母德富久子、横井小楠夫人つせ子、矢島楫子等及び其配偶と環境を活かして、一篇の實傳は小說よりも面白い。

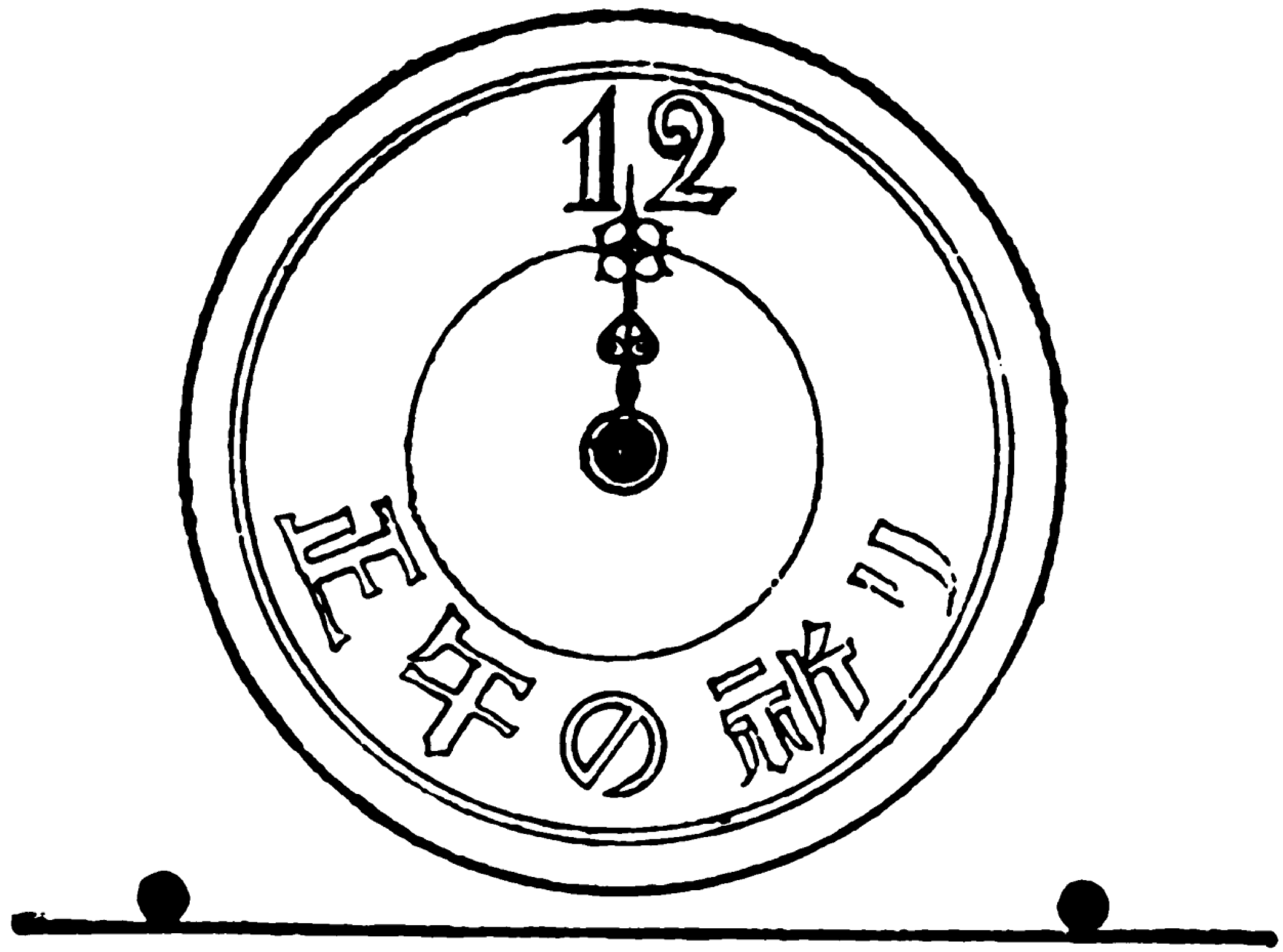
東京銀座 **福永書店** 振替東京四〇四六六

第三百三十一號目次

FUJIN SHINPO

No. 331. September. 1925

CONTENTS



われらの主ヱホバよ、なんぢのみ名は地にあまねくして尊きかな、その榮光を天におきたまへり。

われなんぢの指のわざなる天を觀、なんぢの設けたまへる月と星とをみるに、世の人はいかなるものなればこれをみ心にとめ給ふや、人の子はいかなるものなればこれを顧みたまふや。

只すこしく人を神よりも卑くつくりて榮と尊貴とをかうぶらせ、又これにみ手のわざを治めしめ、萬物をその足下におきたまへり、すべての羊、うし、また野の獸、そらの鳥、海の魚、もろ〳〵の海路をかよふものまで皆しかなせり。

われらの主ヱホバよ、なんぢのみ名は地にあまねくして尊きかな。

――ダビデ――

全國の會員と知友の前に申す

矢島楫

九十壹年の旅路を辿つて、最後の幕よと人も思ひ、我も思ひし難關も、幾度か不思議に助けられ、今日は又再び椅子に座して食事を取るまでになりました、何と云ふ御旨でせう。

この春私を愛する甥、徳富健次郎の手で、私の姉竹崎順子の傳が出版されました、この內に、私の生涯も亦マザ〳〵と描き出されました、其一節に、戀愛の結びし實、妙子の語があちこちに現はれて居ます、皆樣は、之に對して僅かに一種の不安を御抱きになり、又暗き疑を御持ちになつた事と存じます、私は今日これについて皆樣の前に謹しんで告白致します。

私が林家に嫁して、一男二女を擧げ、ほとんど拾年の同棲の生活を營んだ時、私は當時一般の風習であつた飲酒の爲めに、良人の日常が全く常規を逸し其許に在つては生命も危いと云ふ事を知りましたから、斷然意を決して、當時赤子であつた達子をふところにして、良人の家を去り、復籍しました。

兩三年間、兄弟の家をさすらつてから、兄矢島直孝を助くる爲めに上京しました、この時、私は兄の家庭の取締りを爲しつゝ勉強して居りました。

此時です、私は申すも苦しき次第ですが、兄が賴として居つた書生の一人と愛に陷つて妙子を宿したのです、其男は家を持つものでした、私は其後全く往復を斷ち、導かれて神の道に入り、五十餘年の精進の生活を營むことが出來ました、然し罪は罪を生みます、私は妙子の不行跡に對し、母としての責任を感じます。

九十一歲の今日までながらへて、今日私は、皆樣の前に恥を忍んで、この告白を致しますのは、死よりも苦しい事です、然し私の生涯の後半の事業として殘す基督敎婦人矯風會は、強きが故に設立したのでなく、弱きが故に、實に弱きが故に、人間の行路を少しでも誘惑を減じ、人生を歩み安くする爲めに、建てたものです、こゝに私の敎へ子、且つ矯風會の一員なる、久布白落實の筆を借りて、私の告白を皆樣の前に爲し、謹しんで、過去の生涯に對して、皆樣の御宥しを願ひます。

千九百貳拾參年七月廿三日

赤坂區新町三丁目四拾六番地

矢嶋楫子略傳

矢嶋楫子は天保四年四月廿四日、熊本縣下益城郡杉堂村に生る。父は矢嶋直明氏母は鶴子、楫子は其第六女なり、長じて林氏に嫁し、一男二女あり、故ありて復籍し爾來上京、東京府の教員傳習所に入り、小學校教員の資格を得、芝區櫻川小學校に奉職。

明治十二年十一月九日築地新榮教會に於て、宣教師タムソン博士より受洗。

同十四年九月牛込區拂方町日本基督教會に轉會今日に到る。

明治十三年に到り、築地新榮女學校に於て教職を奉じ、同廿二年に到り女子學院々長に轉じ、大正二年まで卅有餘年職に有り、大正二年職を辭し、後専ら矯風會に盡瘁す、楫子さきに明治十九年基督教婦人矯風會を創立し、其會頭たる事三十五年、齡七十四歲にして始めて渡米、ボストンに於ける第七回矯風會萬國大會に出席、次いで八十八歲にして再び倫敦に於ける第拾回萬國大會に出席、翌年更に米國に於ける華府會議に出席、三度海を渡りて萬國平和の爲に力を盡す。大正四年勳六等寶冠章を授けられ、更に大正十三年二月勳五等に叙し瑞寶章を授けらる。

歸朝後病に臥し今日まで四ヶ年、婦人ホーム内、矢嶋寮にて靜かに病を養ふ、病篤きに及び特に從五位を賜ふ。

大正十四年六月十六日午前一時十分眠るが如く逝く、時に享年九十三歲。

（大正十四年六月十六日）

葬儀執行順序

大正十四年六月廿六日午後二時
於青山會館
司會者　田島進

- 一奏樂　宇佐美爲子
- 一合唱　女子學院五年生
- 一聖書朗讀　竹川晃雄
- 一祈禱　留岡幸助
- 一獨唱　ミス・ダーテー
- 一弔詞　小崎弘道
- 一同　三谷民子
- 一同　エー・オルトマン博士
- 一獨唱　濟山信子
- 一弔詞　全國支部代表
- 一同　山室軍平
- 一同　德富猪一郎
- 一弔文弔電披露
- 一挨拶　小崎千代
- 一告別敬禮　一同起立
- 一頌榮　一同
- 一祈禱　小方仙之助
- 一奏樂　宇佐美爲子

以上

頌榮

ちゝみこみたまの
ときはもがきはも
みさかえあれ
おほみかみに
みさかえあれ
アーメン

矢島先生

（大正十四年六月廿六日、青山會館に於て、矢島楫子告別式に際し、演說の一斑）

徳富蘇峰

一

會葬者各位、前日本婦人矯風會々頭矢島楫子先生——私は先生と申すよりも、寧ろ叔母さんと申したいです、併し此の式場では、矯風會の方々の唱へらるゝ通り唱へます——を、矯風會葬とせられたのは、當人に取りて、定めて本望であらうと存じます。當人は明けても矯風會、暮れても矯風會、其の念頭に掛つたものは一に矯風會でありました。されば矯風會の皆様方が、相ひ集りて、此の葬式を會の名をもて營み給ふこと、如何ばかり當人に取りては、悦ばしき事で御座りませう。

且つ青山會館を、其の場所と定められたことも、亦た滿足であらうと信じます。青山會館の成立には、先生も少からぬ感興を持つてゐられました。而して此の場所は、先生とも淺からぬ縁故があります。卽ち先生の姉にして且つ知己であり、其の隱れたる後援者の第一人たる、徳富久子の其の晩年を送つた地であります。而して先生は、其の戰ひ疲れたる心身をば、恒に此處に來りて安息を求められました。されば最後の安息たる發途を、此處にて見送ることは、決して偶然ではありますまい。

更らに斯く申せば、聊か僭越に渉る様ではありますが、不肖私が此の壇上に立つことも、先生に取りては意中の事と存じます。餘程久しき以前、先生は私に矯風會の演説を頼まれました。私は元來演説が嫌ひでありますから、之を斷りました。然るに先生は故らに一書を送りて、

御身は予の葬式には、フロックコートを着て是非共立會はねばならぬ義務ある人である。されば予の葬式に臨む積りで今度は出席して貰ひたい。
との意味を告げられました。

又、最近數年間、私が先生を見舞ふ毎に、叔母さん、あなたの葬式には、必らず私が何か一言申しますから、御安心下さいと、繰り返しました。その度毎に、先生は快心の表情をせられました。

只今私が、此の壇上に立つを辭しませぬのは、故人と生前の約束があるからであります。併し私は決して先生を譽むる爲めに立つのではありませぬ。唯だ當り前のことを申すのみであります。

二

葬式廣告の文句ではありませぬが、生花や造花の御寄贈は御免である。況んや言葉の花に於てをやだ。特に私は斷る迄もなく、先生に就ては、當初よりの嘆美者でもなく、崇拜者でもありませぬ。實を申せば、故人の弱點、缺點、短所、不好所は、百も承知してゐます。私は如何なる具合であつた乎幼少より此の叔母さんは嫌ひでありました。而して長き歳月の間、嚴正なる批評家の態度を持て、其の一切を觀察して居りました。されば私が故人を買ひ被るとか褒め過ぎるとか申す心配は斷じてありませぬ。

併しながら如何に峻嚴なる批評者として、之を觀察しましても、一切を乘除して、矢島楫子は、明治大正の御代に於て偉大なる婦人の一であることを、否定する譯には參りませぬ。其の日本に於ける女性の理想を、高からしめたる點に於て、其の世界に於て、日本女性の眞面目を發揮したる點に於て。其の日本に於ける教育、及び社會、廓清事業に於ける功勞に於て。而して其の特殊なる性格の持主として、其の活ける模範を現代及び後世に遺せし點に於て。

日本の歴史には、多くの偉大なる女性が、凡有る方面の役目を働いて居ります。恐れながら天照太神以來、神功皇后などの話は、姑らく措き、王朝時代の紫式部、清少納言の文學に於ける、鎌倉時代の平政子、元龜天正時代の豊臣秀吉の正室北政所の如き、若しくは徳川時代の春日局の如き、何れも特色ある働きをなして居ります。恐れながら明治時代には、

我が昭憲皇太后の如き、御方も在します。斯くて歴史を趁うて近世に至り、更らに現代に至りますれば、到底日本の歴史から矢島楫子を見逃がすとも、見落すとも、出來ますまい。若し明治大正の御代の女性を、史家が數へんとせば縦令唯一人たらざるも、第一人でありませう。第一人たらざるも、少くとも其中の一人には相違ありますまいと、確信致します。

三

矢島先生も亦た土から生れた人です。其家は一兩一疋と云ふ格にて、熊本に於ける郷士であります。父は矢島忠左衛門直明と申して、循吏でありました。母は三村氏鶴子と申して當時に稀れなる賢夫人でありました。私は今朝亡母が——楫子刀自の姉——嫁時に携へ來りました、外祖母鶴子の手寫したる藪慎菴先生の其女を嫁する際に、與へられたる訓書と、百人一首との二卷を、筐の底から取り出して見ましたが、中中見事な手跡であります。其人の聰慧なる性格が、文字の上にも立派に現れてゐる樣に覺えました。

先生の同胞は八人、其の七人は女子で、先生は末から二番目です。此の八人の同胞は、何れも一風變りたる人々でありました。中にも先生の兄矢島源助直方、其姉竹崎順子、徳富久子などは殊に目立つて特色がありました。先生は勿論申す迄もありませぬ。

矢島直方は、未だ二十歳にならない前から、父の代役を勤めました。横井小楠の秘蔵弟子でありましたが、やがて小楠の手にも及ばぬ漢となりました。彼は卓越したる天分を持つて居ました。而して二十歳に達する前に、それが殆んど發達し盡し、その以後は、別段進歩の效が見え無かつた樣でした。

明治十年の亂に、彼の郷里は、殆んど戰爭の衝となりました。然も直方は平氣で兩軍の間を馬に騎りて往來しました。やがて賊軍——當時の稱に從ふ——の爲めに縛せられて、木山の營に送られました。其時には徳富久子——私の母も亂を避けて里方に歸りてゐました。久子は先つ亂を避けて來り集りたる、親類中の若き女性達を隠匿し、自から其衝に當りました。賊軍の人々が草鞋著のまゝ疊の上に、どか〳〵と上るや、久子は、直方は逃げも隠れも致しませぬ、緩々草鞋を解いて御上りなさいと申しました。彼等が喉渇きて柄杓もて、手桶から水を飲まんとするや、茶でも湯でも御望み次第に差上げますから、靜かに召上れと申しました。而して彼女は、

其兄を潔よく賊軍の手に渡しました。

直方は平氣で、木山の營に至り、是非自分を西郷の前に伴ひ行けと申しましたが、賊兵は中々其望を叶せませぬ。彼は退屈の餘、懐中から十圓札を出し、此邊には鰻屋がある筈なれば、鰻飯を取りて貰ひたいと註文した。斯る折しも賊將が其營を見舞ひ彼の顔を見て、ヤー矢島君ではない乎、斯く云はるゝ御身は崎村氏ではない乎、と互ひに顔見合せて語りました。

崎村は熊本協同隊の主將で、直方とは、長崎以來の知人でありました。彼は直方を諭して、强ひて護衛兵を附けて、之を戰爭圏外に送り出しました、而して直方は、それから東京に至り、其の歸途私は京都同志社在學中で、京都で面會致しました。

先生の兄と姉とによりて、大概先生を推量することが出來ませう。

四

併し先生は兄よりも、姉よりも皮が厚く、骨が硬くありました。彼女を勝と命名したのは、其の姉の竹崎順子でありました。彼女を澁柿と綽號したのは、其の姉徳富久子でありました。先生は實に勝氣の女で、勝とは名詮自證です。而して中中澁い質で、澁柿との綽號も、決して不當ではありませぬ。此の澁柿の澁味は、先生の老年のみを知りたる方々には、お解りになりますまいが、中年若しくはその以前から知つた人には、誰れでも滿喫せぬものはありますまい。併し矢島先生を大成せしめたのも、畢竟此の澁味であります。

先生は其の骨格も、同胞中では偉ましき方であり、其の容貌も、其の直きの姉横井つせ子と共に、一對であり、云はゞ此の二人の姉妹が、矢島家の大番小番でありました。然も天は先生の身と心には惠んだが、其の運命には惠まなかつた。先生は其の生家の隣村なる、林氏に嫁して、一男二女を舉けたが、遂ひに大歸した。先生自身の言葉で申せば「私は家庭には失敗者です」而して其の結果が、先生をして、他日熱信なる禁酒論の、先驅者たらしむるに至つたのであります。

先生は明治五年兄直方の病を看護せんが爲めに上京した。併し此れは看護のみではなかつたでせう。先生は必らず東京

に出て、何か爲す所あらんとしたのでありませう。當時先生は四十歳。先生は途中、長崎にて船が港に並んで居たのを見て、自から勝子を楫子と改名しました。楫は船の主宰であります。先生の志も決して少小ではなかつたでせう。

明治五年上京後間もなく東京府の教員傳習所に入り、小學校教員となりました。此れから明治十二年十一月、築地新榮教會にて受洗する迄は、先生の一生中、私は餘り多く語るを好みませぬ。而して先生も亦多く語らるゝを好まぬであらう。云はゞ此の期間は先生に取りて、其の向上の進路を尋ねて、岐路に彷徨した時代であります。卽ち運命の波に飜弄せられた時代であります。

五

先生の新生活は、明治十二年築地新榮女學校に、教職を奉ずる前後から始りました。而して先生は其の職協者に、ツルー夫人を得た。やがて櫻井女學校を引き受け、それが發達して女子學院になりました。明治二十二年から、先生は女子學院々長となられました。而して大正二年に至りて、始めて之を辭し、專ら婦人矯風會に從事することとなりました。

先生は教育家として、理想的とは申されますまい。先生は女性として、相當の學問はありましたが、外國語は一切不通でありました。和漢の書籍にも、左程多く目を通されたとは思はれませぬ。先生は筆翰に妙に、手紙などは實に見事でした。併し想を花鳥風月に遣る詞藻に至りては、恐らくは其姉德富久子には及びますまい。而して學生から愛慕せらるゝ點では、とても其姉竹崎順子の半ばにも達しますまい。

先生は善謀、善忍、善斷、善行、統御の才と力とに豐富でした。押しも強う御座りましたが、押されるのを踏み堪へる力は、猶更ら強ゥ御座りました。大抵の者は、先生の底力の強さに叩頭しました。正直の所が、先生は愛せらるゝよりも、寧ろ畏れられました。先生は親まるゝよりも、寧ろ憚かられました。先生は決して無情でもなく、輕薄でもなく、冷酷でもなく、不親切でもありませぬ。先生には先生流儀の愛もあり、先生流儀の親切もありました。併しそれが實際幾許の程度迄、徹底しましたでありませう乎。

外國人と事を與にするは、中々厄介であります。新島先生の如きも、此には屢ば氣を腐らせました。人の知らざ

ろ涙をも流しました。矢島先生も隨分骨が折れましたでありませう。併しそれを甘く梶を取りて、目的に達するは先生の長技と申しても差支ありますまい。先生は能く辛抱しました。

六

先生は教育家としても、明治大正の御代に、一個の位地を占む可き資格があります。併し先生の本領は、寧ろ社會事業にあります。此の方面には、先生は氣も魂も、凡有る總てを打込みました。

日本婦人矯風會は、先生のみとは申しませぬが、先生が實に其の重なる發起者であります。先生と同時に此事を思ひ立つた方々も若干ありました。されど始終一貫、明治十九年以來其の會頭たる三十五年。先生は實に矯風會の會頭であるばかりでなく、其の生命でありました。

婦人矯風會は、必らずしも飲酒、賣淫、其他の社會的害惡に向つて、挑戰するのみでなく、又た墮落したる婦人を救濟するばかりでなく、法制上に於て、社會上に於て、婦人の身分を保護し、堅固にし、且つ向上せしむるを期するものであります。是等の點に於て、先生は急がず、騷がず、息めず、休まず。宛も潮の湧くが如き態度を以て、運動せられました。

先生は毫も外國語を解しませぬ。然も平氣で七十四歳の折に渡米して、ボストンに於ける第七回矯風會萬國大會に臨まれました。次いで八十八歳には、再び倫敦に於ける、第十回萬國大會に臨まれました。而して其の翌年、卽ち八十九歳より九十歳にかけて、米國の華府會議に自から押して出掛けました。此れは矯風會と申すよりも世界平和の爲めでありました。

八十九歳や、九十歳のお婆さんが、米國三界迄、態々世界平和の爲め出掛るなどとは、聊か非常識の樣に聽えますが、此は決して左樣ではありませぬ。世界平和の思想は、横井小楠先生が、維新の以前から首唱した所でありまして、小楠先生は、若し予をして志を行はしめば、先づ米國に赴き、大統領に向て、世界平和の爲めに盡力せんことを勸誘し、更らに米國大統領によりて、世界の元首や、爲政者とも、協商せんと申しました。矢島先生も、花嫁時代から、否な小娘時代から、其の雰圍氣の中に成長しました。それが六七十年の後に芽が生えて、實を結ぶに至つたまでの事であります。私は決

して不思議とは思ひませぬ。

七

矢島先生は、家庭的には、實に不幸でありました。晩年を托す可き後繼者として、其兄直方の四男四郎を、子供の時から養ひましたが、數年前に逝きました。林家に在りて産みたる男子も、亦た近年逝きました。而して其の八人の同胞も、皆な逝いて、彼女一人となりました。先生の晩年は、家庭的に見れば實に蕭條として、淋しきものでありました。

併し失望や、落膽は、薬にしたくも、先生には持合せがありませなんだ。先生は徹頭徹尾、戰鬪的精神が、燃えてゐました。先生は世界平和を、生温く主張するのではない。先生は眞劍でありました。固より他の女性の如く、泣き叫ぶを以て眞劍とは致しません。先生は眞劍になればなる程、靜まりかへりました。

先生には感傷的要素は、絶無ではなかつたが、決して多量ではありませんでした。先生には情熱が中に燃えてゐました。然も何れかと云へば、理性的の人でありました。涙もありましたが、外に注ぐ涙ではなく、内に呑み込む涙でした。先生には、女性に通有の感情的とか、愛憎的とか、虚榮的とか、間歇的とか、其日暮らし、刹那主義の行徑は、殆んど見出し難くありました。云はゞ先生は、理智で打ち固めた樣な人でありました。

但だ晩年には、其の理智の厚き氷を破りて、内心の情火が燃え出しました。先生の滋味が漸く甘くなりました。先生は年と共に女性の通有性である、凡有る弱點をも、不用意の中に發露しました。併しそれが先生の累とならぬのみか、却て先生の人間味が發露して、孤獨なる先生をして、其の周圍と融合せしめました。ゲーテは、大人は弱點をもて、世に繋がると申しましたが、如何にも尤の言と存じました。

斯く考へて來ますれば、先生の晩年は、夕陽の西天に五彩の光を放つ如く、如何にも美しく、如何にも鮮かに、如何にも麗はしく見えます。先生の晩年は、家庭的には不幸でありましたが、綜合的に申せば、極めて幸福でありました。先生は上は、皇后陛下より、下は未見、未知の有志男女から、識認せられ、愛重せられました。況んや其の周邊の者をやであります。

八

凡そ偉らき女性は、男子よりも強固なる意志の持主であります。平奴子でも、北政所でも、明智秀林院でも、春日局でも、皆なその通りであります。古のエリサベス女皇、近くはヴイクトリヤ女皇、若しくは奈翁三世のユゼニー皇后の如きもそれであります。我が矢島先生も、強固なる意志の持主としては、其の以上でなくとも、同列に入る資格は、確かにあります。

凡そ私が此迄面会した人の中にて、男女を問はず、先生程人を喰つた者は、餘りに多く見受けませぬ。否な殆んど見受けませぬ。先生の眼中には、何の恐るゝ者もありません。先生は人を物の数とも思はない様でした。先生は寧ろ冷笑病には時々罹られた様ですが、感心病には遂ひに罹つたことがありません様でした。

それと同時に男女を問はず、先生程の勇者は、焉くに在りませうか。先生は人にも、物にも、恐るゝことを知らぬ女性でありました。勇氣は矢島家の持前でありましたが、先生にはそれが頗る豊富でありました。而して先生の勇は只だ一時的の發作でなく、恒久的でありました。而して其の勇氣の最後は、捨身の勇氣でありました。本来無一物てふ、大覺悟の勇氣でありました。マシユウ・アーノルドの詩に、聖アウゴスチンの母モニカが予の斃れたる所に予を埋めよ。何處に在りても、審判の招告をば聴くであらう。けれども神の壇上に於ては、予を忘るゝ勿れと云うたのは、宛も矢島先生が八十八歳英國に赴き、八十九歳米國に赴きたる際の、心意氣を歌ひたるものでありませう。

又た女性は、概して男子よりも辛抱強きものでありますが、然も矢島先生程辛抱強き者が、世に幾許ありませう。古人の忍辱護二眞心一と申す言葉は、宛も矢島先生の半生涯を、説明し得たるものと存じます。先生は實に辛抱強くありました。石に喰ひ付ても、放すまいと思へば、放しませんでした。

先生は其の境遇からでもありませうが、非常に儉約家でありました。先生は自から奉ずること、極めて薄くありました。併し如何なる所に行き倒れても、恐らくは葬禮金だけは持つてゐました。然も先生の儉約は、金錢ばかりではありませぬ。驚く可きは、其の精力の儉約であります。先生は骨を惜む人ではありませぬが、無用の事、若しくはそれ程必要なき事には、決して骨は勿論、氣も心も遣ひませんでした。先生は無用に節して有用に使ふの人でありました。但だそれが餘りに徹底的でありましたから、先生は聊か打算的にも見え、少しく冷やかにも見え、何となく勘定づくめに、世を渡る人の様にも見えました。併し先生程の仕事を做さんには、情に任せて力を消磨することは、決して両立す可きものではあり

ませぬ。

九

先生は自主自立の人でありました。此れは先生が家庭を離れて、個人的生活をせられた爲めでもありません。併し吾自做ニ我事てふことは、先生の始終を一貫してゐました。それは生活の上にも、思想の上にも、而して仕事の上にも。

先生は決して他の憐を請ふやら、同情を求むるやらの、女々敷振舞はありませんでした。それのみならず、其の進退出處に就ても、他に相談するとか、他に誨を乞ふとか云ふことはありません樣でした。但だ先生が女子學院長を辭する場合、日本婦人矯風會々頭を罷めらるゝ場合は、或る親近者の意見を求められた樣でありました。

凡そ世に自治の人と云へば、先生の如き、完全なる自治の人はありますまい。私共から見れば、今少しく自治で無つたならば、門下の桃李は、必らず更らに多く繁昌し先生の周邊は、更らにより多くの隨喜者を來したであらうと思ひます。併し此れは先生に不足を申すのではありませぬ。

先生には、過去はありませんでした。それは先生の過去は餘りに樂しき過去でなかつたからでもありませう。されど先生は衛の武公ではありませんが、九十歲になりても、尚ほ向上の進路を辿りつゝありました。先生に取りては、一日の生存は、一日の進歩であり、一日の生活は、一日の奉仕でありました。而して死に抵る迄、小は其の養うたる兒の上四郎の寡婦、孤兒の事から、大は矯風會、若しくは世界の平和迄、盡す丈の力を盡し、足らざる所は、祈禱を以て、之を補充しました。而して最後には、「既に予の成さんと欲するだけの事は成した。此上は徐ろに神の御招きを俟つのみである」と申されました。此の如くして、實に先生の永眠は、平和でありました。而して先生の凱旋でありました。

諺に後生願の牛根性と申します。そは女性は老大と與に、愈よ片意地なるを意味します。されど先生の晩年は、全く之と相反しました。先生の雄心は猶ほ勃々として、時に[illegible]辛辣なる言辭の閃めきが、露はれましたが、概して好々爺となられました。而して恰も澁柿が、霜を經て澁味が脱け、甘味のみとなる如く、情趣濃かに、思やり深く、柔和にして、愛に滿ちたる人となられました。而して其の最後迄盤りなき精神をもて、昇天せられました。

私は餘りに長く、此の壇上に立ちました。されど此れは故人に對する、私の約束を果たす爲めでありました。私は尚ほ申上たいことは山々ありますが、先づ此にて打切りと致します。（完）

先生の御昇天から埋葬まで

副會頭　ガントレット恒子

◇六月十四日は私が先生に御目に掛つた最後の日であつて本當に思出の深い日となりました。

十二日から少しく不快で半休的に働いて居た私は、十四日は日曜日で守屋東氏の留守中とて、婦人ホームの皆さんに禮拜の御話を頼まれて居たので、午前九時四十分頃大久保の婦人ホームへ行きました。例に由つてすぐ二階へ行つて明け放してある先生のお部室へ這入りますと、いつもニコニコして手を出して握手を下さる先生は、此方を向いては居られたのですが、ウト〳〵しておゐでになりました。昔から寢起きの惡い先生を知つて居ますから、私は先生が又眠りからお覺めになつたばかりで、御氣分が惡いのかと考へ、向ふ側の寢臺の竹崎さんの方へまわつて行つて「先生は御機嫌が惡いのね」と云ひながら御見舞ひの言葉やら、留守中の守屋さんが今頃は何處を航海して居られるだらうなどゝ世間話をして居ると、先生は私の例の高調子が御耳に這入つたと見え、後の方へ御體をねぢ向けて私の方を御覧になりました。早速先生の前の方へ廻つて行つて御手を取りました、先生は實にやさしい御もゝちで兩手に私の手をおもちになつてさするやうにして、おぢぎをなさいました、先生をお笑はせする守屋さんの留守で御淋しいのだなと思つて私は敢然に「先生私は今日は御坊さんの役を御つとめに参りましたの、御說教が濟みましたらゆつくり御話いたしませうね」と申しますと、又輕くうなづいてニコ〳〵して只確く私の手をお握りになりました。之が先生との最後の握手而かも御意識のある間の最後の御面會であらうとは少しも考へ及びませんでした。其時の光景を想ひ起すと今でもあの先生の羽二重の樣な軟い温い御手ざはりを感ずる樣な氣がします。靈化され、淨化された先生の靈魂を其まゝ表現するあの優しい而かも强い力のこもつた御眼を私はどうして忘れる事が出來ませう。自宅からの急の迎への車で急ぎ歸つた私はもう再び先生から笑みも握手をも頂く事が出來なかつたのでした。

◇翌十五日午前六時頃、婦人ホームの築山姉から、鉛筆の走り書きで「昨夜から先生の御工合が惡いやうです、今は誰も、しつかりした方がホームに居られませんから御出を願ひます」と言ふ手紙が來ました、前日御目に掛つて居る私は、決してそんなに急激に御惡いとは思ひ得ませんでした。自分も前々日から殆んど絕食をして居つた時なので、起きても眩暈がして困つてゐました。けれども築山さんが心配して迎へをよこしたのだから、ともかくもと、勇氣を鼓して、仕度をしてホームに車を飛ばせました。七時十五分位だと思ふ頃先生の御部屋に足を忍ばせて這入つて見ると、藤井女醫と看護婦に護られて横臥せらるる先生の御顔には何の御苦痛の

色もなく、平和に御眠りになつてゐました。

藤井姉は私を次の室に導いて、「今早朝稲田博士、田原醫師が御診察になりましたが 御二人とも同じ御意見です、先生のことですから二三日持つか 一ヶ月持つか或は又御快復なさるか分りませんが、昨夜から人事不省で昏睡状態が持續して おいでに なるのですから、マア只今の症狀を考へると今度は、ドウしても御全快は六ヶ敷く思ひます」と申されました、守屋さん久布白さん山内さんと皆お留守の事で 私には何うしてよいか分りかねましたが、折よく御出でになつた徳富先生御夫婦に御相談申上げて、會の常置委員一同と親戚御一同へ 打電したのです、電話で御知らせした小崎會頭は十時前に お見えになり、やつと私は安心が出來ました。

◇

先生は一分間置き位に呼吸が止まつたり あつたり なさることが一日に三四回、發作的に大聲を發せられたきり、あとは只日常安眠して居られ た時と少しの異つた處はありませんでした。藤井女醫と看護婦二人は(此朝急に大關看護會に特に御依頼した方を加へて)附き切りでしたが、私共は小い室に餘り大勢居る事は惡いので次の部屋に詰めて居つて、色々萬一の場合の御相談など いたして居りました。「先生の御臨終です」と傳へられては、御部屋へ走つて行つた事も三四 回 ありましたが、其他は何をなして差し上る事のない靜安な御 狀 態で平素先生が「私は天國へ歸る時は、誰にも面倒を掛けずに歸るよ」と申された事を思ひ起し、先生の御希望を叶へて下つた神さまに感謝せずには居られませんでした。

◇

十五日午後四時頃、

畏くも皇后陛下からの御見舞品を持つて宮内省から、御使者が御出で下されました、會頭の命に由つて 私は美事な 御菓子四箱と新宿御苑に生れた鷄卵一箱を謹んで拜受致しました、いつも乍ら國母陛下の御仁慈深い事を心から感謝いたしました。意識はおありにならなくとも、先生へ其難有い陛下の思召を申上げて御卓の上に飾りました。

◇

先生の屬して居られた牛込教會の牧師田島先生は、報に接して直ぐ來て下さいました、而して最後まで實によく御世話下さいました、時はズン〳〵過ぎて行きます、各新聞社からは、電話やら御人やらで御問合せがあります、宮川幹枝姉を此方面に御願ひして萬事手落ちのない樣にして頂きました、御見舞客はあとから〳〵と續きました。

山内姉は御病人を其まゝにして急いで歸京して下さいました、久布白姉の歸りの待たれる事と、守屋姉には直ぐ打電しても、どうにもならぬと云ふ事は會頭と私の苦痛でした、時は容赦なくたつて夜雨がシト〳〵降り出しました、夜十一時頃(六月十五日)、小崎會頭の夫君弘道先生、田島先生其他御親戚の方々の居合せた方々が、もう御臨終近い事と集つて、先生の御寢臺の まはりに 立ちました、小崎牧師は、先生の靈を御

手に御返し申しますと、靜におごそかに御祈り下さいました。

◇

生死は神より他には知り得ぬ事とて朝まで持たれる事か或は今夜のことかと時々刻々祈の中におつきして居ります内、御遠方の方は終電車がなくなるので御歸りになります、田島先生の御歸りにならぬ内に先生の呼吸の御有りになる間に、是非守屋さんの爲に寫眞を取つてせめてもの心やりに殘して置き度いとの會頭の御注意に夜半寫眞屋を招いて、撮影いたしました。

◇

十二時も無事に過ぎ一時もと云ふ頃、藤井姉の御注意で又一同御部屋に這入り、物云ふ者一人なく靜寂の中に先生をかこみました、午前一時十分（六月十六日）「之でお終ひでいらつしやいます」との藤井姉の宣告がなければぢつと御顏を見守つて居る者にさへ判らない靜かさで、先生は天に御歸りになりました、其靜肅さに打たれ、誰も聲さへ發するものはありませんでした。眼のあたり偉人の靈の昇天を見る心持ちは、體驗せぬものには解し得ぬ處であります。私は只「神よ此惠まれた、偉人の生涯を此世に與へて下さつた事、私共に其生涯に接するの機會を特に與へ給ひし事を感謝し奉る、何卒此偉大なる一生に由りて、あなたの御救ひの力、御惠の深さを示し給へる事を謹んで感謝し奉る」と心の中に祈るのみでした、他の方々も確に只祈心に充ちて立つて居られた事と信じます。

◇

此間略三十時間、先生の側の御寢臺にあつて全般を熟視し居られた竹崎逹子氏（先生の第二令孃）の御心持を御察しするよりも寧ろ其立派な御態度に打たれました。流石は先生の御娘だと思はぬ譯には行きませんでした。半身不隨で寢床の人となつて居られた事は實に御氣毒ではありましたが、又姉が先生の御臨終を終始御覽になつた事は、逝く方の滿足御本人の滿足、且つ私共の滿足であつたと矢張感謝です。

◇

先生の遺骸に次室へとうつされました、守屋さんが衣裝させた先生御自筆の「愛也」の額の方を枕として、小さい寢臺の白布を以ておほはれたものの上に、四月廿四日の最後の御誕生日に召された白紋羽二重の御召物に包まれて、仰臥された御姿は神々しく見えました。枕頭の卓には皇后陛下よりの恩賜の品々と、懇情な飾りました、此御姿も遠い方々へ留守の方々への爲、撮影いたしました。

翌朝五時久布白落實姉はやつて來られました、私はどんなに力强く感じた事でせう。

◇

先生病篤しと聞こしめされて此日畏きあたりより、特に從五位を賜りました。會は御親族の御承諾を得て會葬となす事となりました、十七日午後四時、矢島寮で靜かな告別式が擧げられ、式後直に北村四海先生の御手に由つて先生のマスクが取られました。

午後五時出棺、御親族の中の代表者、會からは、會頭副會頭、其他の役員數名に送られて、獻會の

火葬場に送り此處で、先生の御遺骸は、空高く立ち昇る黒煙と共に御遺骨と化しました。

其夜九時頃 御遺骨は 矢島寮階上の一室に安置せられ、淨花、御下賜品、叙位記、勳章等に包まれて廿六日の公葬を待たるゝ事となりました。

◇

廿六日までの準備萬端、眼のまわるやうな忙しさも、之が先生への最後の奉仕と思へば何の苦にもなりませんでした。

會頭・理事、會員の誰彼はもとより女子學院の三谷民子姉を筆頭に、卒業生、同窓生、特に御親戚の德富蘇峰氏御夫婦、鎌倉の矢島よし子夫人と令息直一氏、金森なも子姉、河瀬三平氏、其他十數名の方々が、大小の用務を誰が指示するともなしに、實になだらかに運ばれた事を見て 之が愛の奉仕を意味して居るのではあるまいかと幾度も思はせられました。

◇

廿六日は、またゝく間に來ました、午前十時に、先生の御遺骨は永久に其愛せられた慈愛館をあとにして、喪主矢島直一君、會頭小崎千代子、副會頭林歌子、吳文部長十時キク子姉等に護られて、式場青山會館に運ばれました、先生の愛甥德富猪一郎氏に由つて建設せられた、大建築物青山會館は、壇上の花に包まれた先生の御遺骨に面して靜座した會葬者を以て溢れました。三千に近い會葬者で充ちた會場は、實に靜肅其ものでありました、三時間に亘る長い式にも誰一人疲れを見せるものなく、偉人を送る辭、殘る者への奨勵の詞と、女子學院の教師並に五年生の心より奏する音樂とに傾聽しました、特に德富猪一郎先生の肺肝より迸り出るやうな矢島先生を送る三十分餘の弔詞は實に偉いものでありました。

◇

廿七日午前十一時に、矢島よし子夫人、淺田みか子理事の特別な御骨折りで求められ、準備せられた、新綠滴る多摩墓地に「從五位勳五等矢島楫子之墓」と記した墓標の下に先生の此世に殘された一塊の御骨は、敬慕の涙と共に、葬られました。

◇

先生を御送りして實に空虚を感じますけれども、今日まで、永の年月、手を取る樣にして教へて頂いた私共は、どうしても其御遺業を完成させなければなりません。殘る私共は一致團結して先生の据ゑられた、磐石の基礎の上に、堅固な物を建て得る樣努力せねばなりません。

（一九二五年八月十四日稿）

矢島楫子女史についての諸家の感想

○

安部磯雄

私は一度も親しく矢島夫人とお話しする機會を得ませんでした。只折々公會の席に於てお目にかゝるだけのことで、個人的交際といふものは一切なかつたのです。それで夫人に對する私の感想といふものは極めて概括的のものであります。

矢島夫人が隨分長い間婦人矯風會々頭として衆望を繫いで居られたといふことでだけでも如何に夫人が偉大なる人格者であつたかは想像されます。我國の男性を統率するには多くの場合非常なる困難が伴ふように思はれますが、狹量にして且つ多分の嫉妬心を有する我國の女性を統率することに成功した矢島夫人は兎に角近代の日本が產出した最大の女性であつたと言はねばなりません。

矢島先生と禁酒事業

日本國民禁酒同盟常務理事 青木庄藏

人生は百年生き長らへたとしても宇宙萬象の永遠に比べて見れば瞬く間である。眞に意義ある力強い生涯は如何に短くとも、眞に幸福であり愉快であり得る。然るに、我が矢島先生は意義深い、力強い、そして至つて長い一生を送られた。之は人間理想の上より觀て敬慕の念に堪えない。されど、先生には其れだけ多くの人知れぬ惱みがあつた。言はゞ花が開き果を結ぶまでの雜草の難、害蟲の難、風雨の難が引きも切らず多かつた。然し先生の有つた善き信仰の種子は、あらゆる障害を排除して生長し終に果を結ばずにゐなかつた。

先生は夙に社會廓淸の根本義として窃に社會的禁酒の徹底を期してゐた。先生の主宰された基督教婦人矯風會の趣旨は

主として禁酒にあつたとは周知の事實である。今や其禁酒の機運は漸く我日本の國にも到來し、婦人矯風會の本來の面目を發揮し得る時機が刻々近いてゐたのであつた。しかも、先生は其時機を待たないで逝いた。遺憾無量である。然し、感謝すべきことは、先生は先生の意志を其儘ついで奮闘努力する多くの敬愛すべき姉妹を殘して逝いた。此意味から基督教婦人矯風會による今後の禁酒運動は注目に價ひする。

去る日余の歐米旅行に際し、先生は特に余を英國に居られた松本兄に紹介せられ、余を以て禁酒事業否社會人道の爲の大切なる人なりと推薦した。之によりて先生は如何に禁酒事業を重要視してゐたかは窺はれる。又最後に松本兄に對しては此地上では面會し得ない、何れ天國に於て必ず再會すると認められた。之れによつて先生の信仰は如何に如實のものであつたかゞ知られる。

今や松本兄は世にあらず、先生もまた旅立たれた。然し先生の靈は、より微妙に我等の中に働き始めた。先生の意志を奉じ無酒純潔なる日本國の實現を期して蹶起するもの男女を問はず近來多くなつて來た。余も又其一人たることを自白する。惟ふに日本國今後の進歩と改造は如何なる方法によるとも禁酒によらずしては決して期待し得らるゝものではない。矢島先生を憶ひ、同時に禁酒事業を思ひ、敢て一言した次第である。

○

福島四郎

某新聞に掲載せられた德富健次郎氏の御話により、矢島先生を道德上の罪人であるやうにいふ人の論據が私には解りません。中年の戀愛事件がナゼ罪惡でせうか。そのために並ならぬ苦勞をして己が生んだ子を育てあげ、その體驗から社會の矯風事業に後半生を投ずるに至つたとすれば、その過失は先生個人のためにも社會のためにも、むしろ祝福すべき事件であつたと申してもよいと思ひます。それを口や筆で告白しないで、五十年の行動を以て改悛の情を明らかにされた處に先生の偉大さがあるのではないでせうか。

矢島先生を懐ふ

鳩山春子

矢島先生には初め故潮田千勢子氏等とよく婦人聯合會等の席上に於て御面會致しました、或日突然拙宅を御訪問下さいまして、近日婦人矯風會總會を開催するから其節は是非出席して一言話す樣にと申されましたので、私は迚も其器に非ずと再三固辭しましたが、先生は穩かに而も熱心に御勸誘を續けられるので、其の誠意に感じまして、之に背くは寧ろ失禮にも我儘にもなるものと悟り自らの拙劣を厭はず御受け致しました。

先生が矯風會を初め其他の種々の公共慈善の事業に關し御盡瘁なされた有樣を考へても先生は百折屈せざる勇氣と如何なる暗黒中にも光明を期待さるゝ强健なる希望と世俗の稱揚より超脱して神聖なる力の承認を貴ばるゝ深厚なる信念を持せられたことゝ存じます。

之れは啻に御自身の御幸福なるのみならず、先生を慕ひ之に化せらるゝ者をして、失望と云ふ人生の仇敵から救はれ、各自其分に應じて生き甲斐あらしめられたことゝ存じます。此稀なる人格者を喪つたことは婦人界のみならず、本邦精神界の一大損失と深く哀惜の念に堪へません。

○

三谷民子

學院が休みになると直ちに旅行に出掛けた爲、御手紙が追ひかけ通してトウ〳〵此の山中で追付きました。モー遲いかと思ひますが默つて居るのも氣が濟みません故ほんの一言いたします。

幼い時から御世話に成つた先生のことで、四十年來御傍近く居つたのですから、遠方から望む富士の高峰のように、雪が積れば美しい、雲がかゝれば詩的だとばかり思ふて居られません。雪は冷たく雪は悲しう御座いました。然し想へば其の雪も雲も皆我々を引きのばして行くに必要なものであつたので、今離れて仰げば嬉し尊し師の御恩で御座います。

今一度手を握つて「しつかりやつて下さいよ」の御聲が聽きたい。

（信州山田溫泉にて）

温い先生の手

三宅やす子

矢島先生に就いて、いろ〳〵おきゝする事は多かつたし、殊に老齢のお身ではる〳〵平和のために米國へ渡られたことを知つたとき、何とも云へない感激に打たれ、そんな事で、かね〳〵尊敬の念をたかめては居ましたが、然し、親しく、先生に接するときまで、あゝした強い感激は持ちませんでした。

丁度、震災後に東京聯合婦人會の集りが屢、大久保の婦人ホームで開かれたとき、今の政治部の前身の生れる日でした。機會があつて、二階の先生のお部屋へ上りました。

其時の印象記は、すぐに私は、私の主宰して居ますウーマンカレントの翌月號に記しました。が、私は、老齢で病床に居られる婦人からあんなに強い印象を受けようとは、豫想も出來ないことでした、よそめにも小氣味のよい元氣と明るさ、それで居て、ちつとも、固くないしつかりさ。

守屋さんが、私の名を云つて紹介して下さいました。私の名は矢島先生には縁遠いものだつたでせう。私はそんな事には頓着なく、此好機にはからず御近づきの出來たのをよろこんで手をさしのべました。

視力はなくなつてらつしやるとの事でしたが元氣に「さう」と云つて、かたく握られた手の温かなやはらかみに、私は驚きました。私の腕から心臓へ、異常なあたゝかみが傳はりました。これは決して誇張ではありません。今も私は此、先生のお手のぬくもりをはつきり感じて居ます。

私は其日から數日、何とも云へない刺戟を受けつゞけて居ました。

それを今言葉で説明する事は出來ません。只、偉きな婦人が持たれる、何かしれない力なのでせう。よく私は、そんな時に涙が出てこまります。

青山會館のお葬式では、手に持つた手巾をすつかりぬらしてしまひました。無意味な悲嘆は、其場では見られる筈もない、只、限りない感激です。

矢島先生の記念號が出るといふ事を承知して、御手紙がなくとも是非、何かかいて御送りしたいと思つて居りました

が、生憎此間から頭をいためて居て何もかけません、大變不本意な文ですけれど只これだけかきます。終りに云はせて下さい。

矢島先生は、私が今まで識つた年長の婦人の中で、唯一の感激を受けた方であります。私が無言の先生の握手によつてどれだけ力づけられ、明るく導かれたかといふ事は、殆んど皆様の御想像以上であります。

楫子矢島先生を敬慕す

根本正

偉人を賞し其の功を讃し其の德を宣揚するは其の偉人のためにあらずして後來其の偉人にも勝るべき人物を輩出し汎く人類の進歩發展を來し世界をして平和幸福に致らしむるが爲めなり。故に偉人に對し深く敬意を表する國は克く其の國を富强に導き延いて他邦をも利せむとするにあり。而して是等偉人を世界に求めむとせば常に婦人と兒童の教育に就き最も重大なる注意を拂ふ國々に在り。之を現代に求むれば英米の兩國に屈指せざるを得ず。

幸に日本に於て矢島先生の如き曾て帝國に於て其の比なき世界的一大事業の先驅者の出でて婦人教育の爲めに獻身以て女子學院を設立せられ長く其の校長として米國ツルー女史と協力犠牲以て種々の困難に耐え學院をして今日の盛大を效さしむ。今や先生逝き其の後繼者として智德兼備の三谷女史を得たるが如きも皆先生の遺業に由らずむばあらず。

○

又先生は明治十九年十二月六日基督教婦人矯風會を創立したり。其の當時先生と共に熱心盡力せられたる佐々木豐壽、潮田千勢の兩女史及び淺井本多兩夫人の如きも先生の誠心誠意を以て矯風事業に傾注克く奬導せられたるを常に深く感謝を拂へり。これ皆先生が早く世界の文明に注目し京に出でゝ直に宣教師に交際し精神的の教育に着眼して目前の利慾に走らず人間たるもの須らく出立の場所に重を措かず光榮ある到着の場所を選擇したる結果に外ならず卽ち先生は第一に先見を主とし第二には思慮第三には決斷實踐すべきの三大要素を以て眞諦とし遂行の信仰と勇氣ありたるを以て日本婦人未曾有の世界的事業を完成せられたり。

○

我が賢明なる、國母陛下には疾に御注意あらせられたるや畏くも再三先生の外航又は病中等に立派なる西陣織のクッションを賜はられ又、陛下の九州より御還啓の時の如き地方の御土産として素麺御菓子及び人形手鞄等種々御下賜の光榮に浴せりと云ふ。斯の一事に見るも如何に先生が社會公共事業の爲め盡力せられたると厚遇を蒙りたるに徴しても窺知するに足る。更に國家よりの功績表彰としては從五位勳五等の榮典を賜れり。 先生既に生前に於て地に在りて天國の光榮をも受けたるに伴し、實に先生の幸運美德を有したるは常に世界人類を愛し平和を主とせられたるに在て其の八十九才の高齡を以て大正十年（一千九百二十一年）米國ワシントンに開かれたる萬國平和會議にも能軀を運ばれ大統領ハーデング氏と親しく會談せらる。當時大統領は大多忙なるを以て各國大使にすら會見の時間僅かに二三分に限られありしにかゝはらず矢島先生に對しては特に二十分の長時間を快談に與へられたり。之れ實に先生が『量包天地』の氣力ありたるを追想せざるを得ず。其の會見中の一詠を玆に記して吾人の思想を强大にするの一助とせむ。

世界皆兄弟也と今ぞしる
隔なき世は關もとざゝず

先生之を直ちに英語に譯して大統領ハーデング閣下に呈せり。

"The people of the whole world are now known to be brothers, separated by no barrier."

世界未曾有の平和大會議の場所殊に婦人にして平和の一大思想を斯く述べられたるは實に日本の名譽にして吾人は深く先生の靈に對し感謝の意を表せざるを得ず。予は常に信じたり、先生は『天を屋根とし地を足臺とす』この聖句に基ける洪大無邊の愛に充ち満てる眞に世界平和の楔となりたる日本の母として最も敬慕記憶せざるを得ず。

先生の遺業は先生の高德を慕ひ熱心なる有爲有力の繼續者たる小崎嬬人矯風會長を始め林ガントレット兩副會長、久布白・守屋兩女史の如き矯風事業に從事せらるゝあり。基督教婦人矯風會の現在及び將來倍々國家を利益するに至るべき實力あるを信ず。

○

西川文子

私が始めて矢島先生にお目にかゝつたのは、大正二年の春新眞婦人を始めた時、木村駒子さんと女子學院の先生のお部屋にお訪ねして、先生が女子教育わけても英語を主とした教育の必要を感じられた動機を伺つたのでした。

その後婦人記者倶樂部の本部が赤坂の矯風會本部にあつた關係上、其の集合に或は先生のお誕生にお招かれして度々お目にかゝりました。

先生は公人としての責任感の強いお方でした。私が大正五年頃神田橋畔和强樂堂で演說會をした時、是非矯風會の方にもとお願しました、久布白さんか守屋さんでもと云ふ事でしたが、まだ當時はお二人は會以外ではあまり演說をなさらなかつたのか、或は野次を懸念されてか出られず困つた時、お約束した事は出なければと云つて、老先生がお出で下さいました。「十八の娘さん（河村春子さん）と八十の矢島先生」と新聞の見出しは書きました。

其の時、先生が底力ある強いお聲で「皆さんあのお婆さんが何を云ふかとお思ひなさりましようが、この皺くちやの顏をようく見ていつて下さい」と冒頭に云はれたのがいつまでも、私の耳に殘つてゐます。

先生は座談も演說口調でした。問題を出して訪問する時期待されない程のお年でありながら、お話はいつも演說口調でちやんと文章になりましたので私はいつも滿足してうれしく思ひました。年齡の差も大に與つてゐましようが、親しみ難い方の樣に思はれましたが、先生は所謂女らしいと云ふこせこせした所を持合せない方で、あのぬうぼう式の大きい所が會長として永年つゞけられた所以だと感心してゐます。

○

元時事新報記者

大澤豊子

「あれが女子學院の矢島先生ですよ」と麴町の、とある路傍

で伴れのお友達に敎へられたのが、よそながらにしても、私の矢島先生を相見るの初めでございました。其後厚生館あたりで屢々開かれた矯風會のお集りに、私は速記の用で參り、矢島先生を一堂の内に相見る機會を得ました。さうです全く相見るとより以上には言はれないよそながらの會見に過ぎませんでした。其頃先生は既に七十近い御高齢であつたと存じます。少しギゴチない、いかついやうな御容子は失禮な申樣ながらお美しいとは見あげませんでした。

其後數年、私が時事新報の、誠に幼稚な、記者と申すも鳴許がましい、それでも其頃には珍らしい婦人記者として女子學院へ出ましたり、先生のお房室をお訪ねしたり致しました際には、心なしか先生は非常に品位がお附きになつたやうに拜見致しました。

先生はなか〱おしやれさんでゐらしつたやうです。服裝などもなか〱氣取つて、獨創的のお召物などを考案してゐらつしやいました。何處から拜見してもハイカラなお婆樣でした。朗かなお聲で、何の問題にでも、頭拔けて新らしい意見をお吐きになりました。お簞笥の抽出からお菓子を出してお茶などをいれて下さりながら、諄々と懇ろにお話になつて居らつしやるかと思ふと、突如として可なり辛辣な警句を仰有つたりなさるときは、機智に乏しい鈍才の私は、お答へもたぢたぢして、折角受けたおもてなしも胸につかへるやうにさへ感じましたが、それも後に承はれば、先生一流の皮肉は有名なもので、之に就ては色々の逸話もあるとのことでしたが成程と肯かれました。

亞米利加からお歸りになつたとき、ワシントンの湖畔で、折柄の霜に染められた唐紅の美しい紅葉の葉を一葉記念にと梢に手をさし延べるや、遠くから巡邏の警官に呼び止められ植物をいぢめてはいけませぬ、やがて自然に散るのをお待ち下さいとたしなめられ、大に恥ぢ入ると共に、彼の地の人の公德心の發達を羨しく感心したとお話になりました。そして記念にとお拾ひになつてゐらしつた落葉をお示しになりましたのを拜借して、時事新報滿廿五年記念號の紙上を飾つたことなど皆思ひ出の一つでございます。

其後の先生は、お齢の高まると共に、頭腦明晰の度は加はるとも衰ふるなく、沈重果斷眞に世界的偉人として恥かしからぬ御風采の美しさと氣品とをだん〱備へられたやうに存じ上げます。矯風會の方々に對されても、老ひては子に從ふ謙讓と圓熟さとが、晩年になるほど、なつかしいお婆樣の御風貌にも御動作にも發露いたして居りました。

婦人記者の職業に就ても、率先して理解と同情とを以てお引立て下さいました。記者のうちにいかゞはしい噂などが立つたりいたしますと「困つたねエ」と仰有つて罪を悪んで人を憎まずの温い御容子で、お接しになつて居るのを、私は難有いと思つて拜見して居りました。

師弟の關係もなく、知己朋友の交誼あるでもない、全く一公人として、先生にお接し申上げた私は、年と共に次第にお親しく、先生の御人格の中から、尊い御教訓の數々を享け得ましたのを光榮に存じて居ります。大正五年の師走、某日、

「夜すでに更けて日近づけり」とは妹の、聖書に於てしばしば讀み覺えたる言葉にしてけふ此頃はまことに感がい深く、今も尚ほ大正五辰のとし〳〵と幾多の言の葉を繰返し禿筆を走らす。

と、八十四歳のお手とも覺えぬ達筆にて、御手紙を下さり母の死後の年の暮の私のさびしさを懇ろにお慰め下さいました。今やその御方は逝いておはさず、賜はつた御書を披いて深き感に打たれずには居られませぬ。

矢島楫子刀自

戸板關子

矢島楫子刀自は女子教育家として又日本婦人矯風運動家として永遠に我邦女性の歴史に名を留むる方と思ひます。刀自は武士道によりて鍛へ上げられた竹崎順子様の御令妹だけあつて、ドコ迄も日本婦人には珍らしいと思はれる程個性の發達した執着心の強かつた方の様に思はれます。

女子學院の校長として永い間育英の事業に當られ其間夥しい姉妹達に良い感化をお與へになつた事は今更ら申す迄もない事です。而して基督教婦人矯風會が創立されたのは明治十九年頃と記憶して居りますが、當時潮田千勢子女史が主として此の運動に關係されましたが其後楫子刀自は育英事業の傍ら矯風事業にも力を傾倒なさつたので、斯業は一層發達したのです。私は刀自は教育家としても功績のあつた方と思ひますが、それよりも矯風運動家としての方がより多く、より深く感化を及ぼされた樣に考へます。確かに刀自は日本のフランシス、ウヰラードとも云ふべき方です。而してウヰラード女史は事務的活動家であつたに對して刀自は人格的な落付きの

ある活動家であつたのであります。

刀自は前後三回も海外に遊ばれましたが、其旅行は單なる旅行でなく、到る所日本婦人のために氣焰を擧げられ、殊に日米平和のために大に論ぜられた邊は、立派な代表的日本婦人の典型と思はれます。私は刀自を世界的婦人として敬服して居りました。

刀自の生涯は確かに日本婦人に大なる暗示を與ふるものであると信じます。

○

山川菊榮

私は故矢島楫子女史には二回ほどお目にかかりましたが、何分にも非常にお年を取られてゐたことではあり、ホンのお顔を見たといふだけで、それについてこれと纏まつた感想を申すだけの材料は持ち合せて居りません。

然し一昨年、大震災後、大久保の婦人ホームの樓上のベッドに横はつて居られた時の女史はもう九十を越して居られたにも拘はらず、四十年餘りも昔の私の母との交情や、餘りお親しい譯でもなかつた私の姉のことなどまでよく覺えて居られたやうでした。私の母がまだ十五六の娘時代に御一所に教會通ひをした時に芽生えた信仰が成長して矢島女史はあゝいふ生涯を辿られたのださうですが、其後家庭に入つたまゝ五十幾年苦勞といふ苦勞をし盡して年老いた私の母は、矢島女史とお目にかゝる機會はなくても昔を想ひ出してなつかしがり一度病床にお見舞ひしたいといつてゐましたが、多分果さずに終つたことゝ思ひます。

こんな關係から、矢島女史を母の舊友として考へることに慣れてゐた私は、何とはなしに親類のおばあさんにでも對する氣で、遠くから矢島女史を眺めてゐた許りで、公人として即ち婦人矯風會の運動の代表者としての矢島女史といふものを厳正な批判の的として考へて見たことはありませんでした。それは女史の抱いて居られる信仰とか思想とかいふものはそれほど私共の生活に縁遠いもので、餘り問題にする必要を見なかつたせいでありませう。

然し封建時代の婦人として育てられた女史が中年からあれだけの仕事を起された熱情と精力とは、確かに敬服せねばならぬ所だと思はれます。今日でも日本の若い婦人でさへ、社

會的に活動するには餘りに氣が弱く餘りに他人の批評や思惑を氣にしすぎる傾向が强いのに、あゝいふ環境に人となり、あの年になつて、あれだけ大膽に勇敢に行動された女史の意思と實行力とは、女史の思想に共鳴することの不可能な現代青年婦人とても、大に學ぶところがあつてよい譯ではないでせうか。

婦人の先覺者

山室軍平

六月十六日の朝名古屋から大阪に赴く車中、國民新聞を買ふて目を通すうち、矢島先生危篤の報を見出し、大阪に着くや否や、直にお見舞の電報を打ち、天滿小隊に於ける士官會に列席して居る最中、本營から來た引續き四本の電報によりて、先生が終に昇天せられた事、其の他の事情を詳にすることが出來た。乃ち

キリストケウフジンノセンカクシヤ、キウセイグンノ、シンジツナルダンイウ、ヤジマセンセイノセウテンヲ、アイセキス。山室軍平

といふ弔電を婦人矯風會本部に打つて置いて、心ならずも豫定の如く、中國、九州へ向けての旅行を續けて居るのである。

矢島先生は救世軍の最も舊い眞實なる軍友であつた。亡妻機惠子は救世軍に投ずる前先生の下にて婦人矯風會の事業にたづさはらせて戴いた關係もあり、私共が始めて結婚生活に入つた時、先生から贈られた山上の垂訓の懸軸は當時疊敷十一疊半の割長屋を、會館とし、家庭とし、「ときのこゑ」の編輯局として居つた私共の、貧寒なる住居には實に分に過ぎた裝飾品であつた。私共は先生の厚意を此の上もなく感謝したのであつた。

明治四十年ブース大將（ウイリアム）來朝の節、當時七十九歳の老偉人を七十五歳の矢島先生が歡迎して東京座劇場にて一場の演說をせられたのは甚く老大將の心を感動せしめた如く見えた。

明治四十三年吉原遊廓大火の後、私共同志がそれを機會に今一度公娼廢止運動を起した際、其の青年會館に於ける最初の大演說會に先生がまかり間違へば暴徒の爲に撲殺せらるゝ覺悟にて、きちんとした身支度にて立會ふて居らるゝを見、

此の武士道的基督者の老女丈夫を、今更のやうに敬慕に堪へなかつた如き事もあつた。

去る五月三十一日、其の頃米國から來て大久保の婦人矯風會本部に宿泊中の東ヶ崎菊松氏及び夫人を、訪問旁々、先生が其の病床に訪問すると、「毎度御傳言を有難う」「いつ御出發ですか」などと御挨拶あり。例によつて短いお祈をして歸つたが、之は私が此の世で先生にお會ひ申上げた最後の機會となつたのである。

先生は日本に於ける、基督教婦人の先覺者である。私は日本婦人の間に、我が救世軍の中にも、多く先生の足跡を踏んで起ち上り、神と人道との爲に健闘する女丈夫の尙多く現れんことを切望に堪へない。

謹んで矢島先生の英靈の天に歸らるゝを送り奉る。

（六月十七日山陽車中にて）

矢島楫子女史

山脇房子

女史は婦人に珍しい意志の鞏固な方で、一旦思ひ込んだ事は、どんな困難に遭遇しようとも、徹底するまでは止めないとの自恃心強く、またそれと同樣に決斷力にも富んで居られました。女史が洗禮を受けられたのは、今から四十五六年前の明治十二年頃と聞いて居りますが、その當時は基督敎信者といへば、何となく異樣に思はれ、一般人からいたく嫌はれた時代であるのにも拘らず、率先信徒となられたばかりでなく、その宗教主義によつて今後の女子を敎育しようと考へられた英斷は、今から見れば何でもないやうですがその當時に於ては決斷力の乏しい人に到底出來る事ではなかつたのであります。明治十八年頃米國から萬國基督教婦人矯風會の特派員ミセス・レビットが來朝したのを機會に矢島女史を中心に日本基督敎婦人矯風會を組織し女史を會頭に選擧しました。而して其會の主要なる目的は廢娼と禁酒とでありました。そこで會頭たる女史は明治廿三年帝國議會が開設さるゝや同志の連署を求めて劈頭第一に議會に請願書を提出されたのであります。

かゝることは三年や五年は續くかもしれませんが大抵の人なら效果がなければ、根氣まけのするものですのに、女史はその採否の如何に拘らず今日まで三十有餘年五十數回の議會

に屈せす、撓まず年々これを繼續されたといふことで如何にその忍耐の氣象に富んで居られたかを、想像されるのであります。

蘇峰氏が告別式の時に、矢島先生はなすべきことは必ずなし、仕なくともよいことは一切仕ない人であつたと申されましたが、いかにもと頷かれました。

實に女史は、意志、鞏固にして堪忍強く然も決斷力に富み物事に動じない方であつたと思ひます。

○

吉岡彌生

明治年間に於ける、女子の先覺者と稱へられたる人々の多くは、和漢の書に精通し、和歌と書に堪能にして、一方單に整家を論ずるにある而已なりし。此時代にありて、夙くも矢島女史は、國家を論じ社會を考へ、先進國の新思想を咀嚼し、以て自ら社會事業に身を投じ、周圍の非難も社會の攻擊も更に意とせず、是々非々主義にて、信ずる目的に向つては一歩も讓歩せず、半世紀を一日の如く實行し來りしは、眞の犧牲的精神と稱して決して過言ではありますまい、又一方に於ては女史に師事せし人々は何人と雖、女史を信じ、女史を敬し女史を愛せざるはなく、隨而女史の創設にかかる彼の大なる國際事業、社會事業には女史歿後と雖第二の矢島女史數名其後繼者となり、永遠不滅否益々發展しつゝある事は一般の認識する所であります。

此意味に於て私は平素女史に向つて眞に日本女子の覺醒を促し、日本女史の地位人格を向上せしめ、日本女子を歐米先進國に紹介したる大恩人であると深く深く感謝しつゝあるのであります。

追想錄

矢島先生と婦人矯風會

會頭　小崎千代

四十五年の間、母の如く、姉の如く、又先生として先達として交つて來た先生が、愈々逝かれたとなると何とも云へない淋しい氣持ちが致します。

矢島先生は同じ熊本の方なものですから、主人小崎の母と親しい交をして居られ、私共の結婚の式にもお立會下さいました。それは明治十四年の事で、今から四十五年前の事です。

そして

明治十九年に日本に始めてキリスト教婦人矯風會なるものが出來た時も、先生は勿論の事、今は大部分此世には居られませんが、日本橋の魚問屋の若奥さんであつた本多たか子さんや、佐々木豐壽と云ふ男勝りの雄辯家や、潮田ちせ子さん島田三郎氏の先夫人、湯淺次郎さんの奧さんの初子さん、海老名みや子さんなど云ふ人々と、組織も何もない、只熱心一方で會の仕事を進めて來たのですが、其頃から先生は年嵩でもあり、常識に富んだ人でしたから、始終先達となつて私共を導いて下さいました。

七十を越して初渡航をし、其後二度も外國に行つて、世界に日本婦人の氣を吐き、大隈侯や澁澤子と對等に交り、皇后陛下にもお土産のお人形を献上するなど、其意氣も其態度も決して尋常の方でなかつた事は申上げる迄もありません、

私共が今、先生を失つたと云ふ事は、恰度イスラエル人が四十年間の先達であつたモーセを失つた樣なものです。明治十九年以來四十年の歴史は全く開拓時代で、一にもモーセ二にもモーセと、モーセを要した時代です。今やヨルダン川の岸に迄着き、目的のカナンの地は呼べば應へる樣な地に見える所です。禁酒の問題にしても、廢娼の問題にしても、既に仕事は緒に就いて居ます。只今一息と云ふ所が殘されて居るのです。

私共の仕事は、ヨルダンを渡る事と、エリコを攻める事で

す。此仕事は、今迄の曠野を歩くと進つてイスラエル全民の協力一致を必要と致します。一人の不平なく一人の落伍者なく陣形堂々と進まねばなりません。

不信仰を抱き、恐れをなすは敵に勝利の印です。私共は私共の仕事が、必ず貫徹さるべきもの、キリストの勝利に歸すべきものと云ふ確信の下に進みませう。そして世の多くの反對も、そしりも、さげすみも、又、覆ひかぶさる樣に來る權威も力も何か恐るゝ所がありませう。先生が何ものをも恐れず何事でも出來ると云ふ信念の上に立つて働かれた其生涯を先達として私共の一歩一歩を踏みしめて參りませう。

矢島先生とツルー夫人

ガントレツト恒子

女子學院と櫻井女學校

母校女子學院が、未だ櫻井女學校、新榮女學校として、二つの別々のものとして存在して居つた時、新榮女學校に已に奉職して居られた矢島先生は、新に長老派傳道局の經營に遷らうとして居る櫻井知加子女史の創設に係る櫻井女學校へ、幹事として、ツルー夫人に伴はれて來訪せられたと私は記憶して居る。本年三月末永眠せられた長谷川きた子女史や私などは、櫻井知加子女史時代からの生徒であつて、幼稚園やら小學校やら分らぬ樣な時僅か七八歳の少女として入學したのであつた。

櫻井先生の北海道行き

小さい私達には、理由は少しも分らなかつたし、又分らう筈もなかつたが、とにかく、櫻井知加子先生は、其夫君と御一緒に北海道へ歸らるゝ事となつたので、前述の樣にツルー夫人、デビス女史等と同時に矢島先生が來られた樣であつた。私達は慈母の樣に優しい、温い櫻井先生に遠く行かれて、其後へ嚴格な、矢島先生に來られたので初の中は隨分面喰つたものであつた。

ツルー夫人と先生

然し子供心にも、いかに、ツルー夫人を矢島先生が敬ひ、且つ慕つて居られ、又ツルー夫人も、全く信頼を以て先生に臨み、眞と愛を以て信仰生活に先生を導き行かうと努力せらるゝ間に、又先生に由つて、單に米國直輸入の教育でなく、本當に其時代の日本が要求する、婦人を育て上げてゆかうとせられたかは、覗ふ事が出來た。

ツルー夫人は實に嚴格な婦人であつたが、同時に非常に賢い、温い且つ寛大な人であつた。夫人は宗教、修身など只決して口でのみは教へなかつた。先づ自ら實行して、子供の手を引く樣にして教へ示して下さつた。デモクラシーの眞意や自治制などゝ云ふ事を、學生の日常生活に能く分る樣にちやんとあてはめて教へて下さつた。

規則のない學校

其時分私共の學校には、學課に就ての外殆んど規則らしいものはなかつた。共同生活の秘訣は「汝人にせられんと思ふ事を又人にも其如くせよ」とのイエスの金言を實行するにありとて、其精神に基いて、萬事を取極め、朝晩の起床、就眠時間、食事入浴の時間、僚修時間など、教師も生徒も同格で一室に集つて、討議し最後に多數決で定むる事、一度定めた事には一同が服從する事を教へられた。其故、御たがひに何の不滿もなく、不文律の内に正しく、公平に、而かも從順に生活する事を、實驗的に教へ込まれた。

矢島先生は、ツルー夫人の同僚として、同勞者として、學校を經營する間に其等の事を、能く研究し、能く呑み込まれた。私共生徒が、時には、新らしい事に出逢ふて、解し兼ぬる處から、不平を云つたり、理由も分らぬのに否定したりし樣とすると、先生は、いつでも私共をなだめて「新しい事、結構でせう。何んでも學んで損はありません。只能く靜かに考へて、好い處を採り入れて行きませうではありませんか」とて、實に先生のアノ澁柿と云はれた御氣性には似合はないと思ふほど、すなほに學ばれたものであつた。

若し矢島先生と云ふ天の成した偉人にも、ツルー夫人と云ふ、基督者の内の基督者、宣教師中の宣教師であつた、實行の

人、愛の人の親父より出づる指導が加へられなかつたなら、其思想に於ても、靈的生活に於ても、屹度今日の先生ほどの成長を見るに至らなかつたのではないかと私は常に考へて居つた。

ツルー夫人の死

ツルー夫人は事業中途にして、病を得て角筈の自身經營すべく建てられた、衛生園に於て永眠せられた。ツルー夫人の死は、確に矢島先生に取ては、大きな打撃であつた。けれども先生は、決して失望はせられなかつた。未だ其時分若かつたミリケン女史と共に、夫人の後を繼いで、立派に、其時已に女子學院と云ふ新らしい名稱の許に、二校が聯合した六ヶ敷い經營を　非凡な勇氣と決斷と忍耐とを以てやつて行かれた。

先生の昇天の室

先生は何時もツルー夫人の、指導と感化に對しては、實に深い感謝を捧げて居られた事は誰でも知つて居る事であるが先生が最後の呼吸を終つて、新しい世界に、新しい仕事に入られた室の壁には、ツルー夫人の額がかゝげられてあつて、丁度、夫人の温顔は、微笑を以て、先生を天の住家に迎へらるゝ如く、輝いて居た。而かも先生の終焉の地大久保百人町の婦人ホームの地所は、ツルー夫人の發案に由つて、先生が購はれた地所であつた。而して其處に起された、救濟事業も矢張ツルー夫人の心に芽ざゝれ、先生の心の中で育てられ、成長したものであつた。

先生の會頭演說

卅年餘の日本基督教婦人矯風會々頭としての矢島先生の、毎年の大會に於ける、演說の冒頭は殆んど同じであつてしまひには、私共が「先生は又明治十九年」と始められるだらうと話し合ふほどで、必ずツルー夫人に御自分が導かれて靈の眼を開かれたからこそ、自分が矯風會をも組織するに至つたのだと云ふ意を傳へられた。

先生の世界婦人への最後のメセージ

五月の中頃であつたと思ふ、米國の婦人記者が二人で先生を大久保の矢島寮に訪ねた。其時一人の婦人が「私共は、之から、シベリヤを經て、米國へ歸りますが、是非先生のメセージを、世界の若い婦人達に傳へ度く存じますから、どんな

に簡單でもかまひませんから一言をと懇願した。其日はかなり疲れて居られた先生は暫時眼を閉ぢて無言で居られたが、やがて、重い口調で、
「私は幸に其處の壁にかゝつて居る、米國の婦人ツルー夫人に、早く神樣の事を敎へて頂きました。實に難有い事です。神を識る事は人間の生命です。力です。どうぞ世界中の御婦人に、凡てのものに先立つて神を識つて下さいと傳へて下さい」と云はれた。
先生の御眼は熱い涙で一杯であつた。

恩師のかたみ

或る年、先生は上州前橋の共愛女學校の庭内に、二三の生徒を伴れて避暑された事があつた。其時私は其學校に奉職して居つたので、毎日先生の御側で敎へて頂いたり、出來る丈の御世話をさせて頂いたりして居た。ツルー先生を能く知つて居る私に、先生は毎日の樣に亡き友ツルー先生の噂さをせられた。どんなに先生が米國人である夫人を愛慕して居られたかを私の心に刻みつけられる樣に感じた。そして御歸京の前日先生は私の前にふちのかけた古い九谷燒の急須と二個の茶碗を出されて、前橋へ來て世話になつた記念に上げると仰つた。其れは幾年か前にツルー夫人が金澤へ行かれた時、矢島先生へ御土産に持ち歸られたものであるから、大事にせよと付け加へて仰つた。其が今私に取つては、大事な大事な二人の恩師のおかたみとならうとは、思はなかつたが、今私は其古い茶器を見る毎に、何とも口にも、筆にも盡し得ない感に充たされるのである。

大きな愛國者

先生は强い〳〵愛國者であつた。けれども、人の心は國境を以てさへぎり得るものでなく、人類は四海同胞の精神を以て平和を保持して行くべきもの、且つ行き得るものである事を、先生は其生涯を以て敎へられた。眞に偉大な愛國者であつた。
矢島先生とツルー夫人とは、私の心の中には、どうしても、切りはなして考へる事が出來ない。此二つの精靈は、洋を隔てゝ東西に生を取つても、其の育ちが異つて居ても、其偉大なところ、進取的な處に共通點を見出し、二つのものが一つになつて、敎育事業に社會事業に大に貢献せられたのだと私は信じて、此敬愛する、二人の在天の靈に深謝と敬意と熱愛を捧げるものである。（一九二五年七月廿六日夜半）

矢島先生を偲びて

副會頭　林　歌子

新しき聖書

關東大震災の際に一切を失はれし先生に無事に逃れ給ひし事を祝して、其年のクリスマスに大型の聖書を贈呈致しました。爾來一年半の間に、先生は毎日聖書を讀ませて聞かれ、心に深く感ぜられし聖語は朱で點をうたせて、新しき舊新約の聖書は先生愛讀の跡を深くとゞめて居りました。

新しき思想

九十三歳の高齢に拘らず、最後の一息まで新しき思想の持主として、最も進歩せる考を以て、靜かに祈り、我國第一の新しき女、進歩せる思想の持主として生きられたのでありました。

毎日聖書と共に新聞の出來事に注意して、社會の出來事に明るく、ほんとに老いたる新しき人でありました、この能力と恩惠はいづこより來りしか。

懺悔の內的生活

先生の內的生活が、私共にまだ想像の出來ぬ程懺悔と感謝に充ちたものであつたと信じます。

九十三年の長き御生涯の半分は、舊日本の婦人として、暗黑の中を辿られし事を思へば、マグダラのマリアの如くに、他人よりも一層も二層も、百倍二百倍の愛を主に捧げ、涙を以つて主の足を拭ひし婦人として、深き懺悔を有せられ、キリストを愛せられし內的生活が、矯風事業となつて、大なる働きを我國にされた事を思へば、實に感慨深いのであります。

「萬事は活ける神の妙しき御攝理。」

「すべての事悉く働らきて益となる。」

との聖語も深く味はれ、只々大能の神を讃美し、深き信仰に導かるゝ事を感謝致します。

恩師愛師矢島楫先生

久布白落實

十五才の正月、東京の麹町、女子學院に預けられてから、昨年の春、數へ年、四十一才の春まで、私は絶えず、時には近く、時には遠く離れつゝも、矢島楫子先生は、唯一つの私の信頼の的でした。

楫子先生に育てられねば、私は無かつたといつも思ひます、私の母、音羽子は、よくこの事を知つて居ます、そして、生み落してから、四十を越ゆる今日まで、唯の一語も私に語りませんでした、素振にも見せませんでした、公私の生涯に於て、私の楫子先生に對する信頼は、瑕疵なきものした。

昨年の今頃です、私が始めて、明かにこの事を耳にしたのは。然し、私は、これを私の母に正すまでは信を措きませんでした、聞いての後の私は、苦しみました、實に苦しみました、太平洋に、大西洋に、暗き思ひは伴ひました、先生の生涯のこの一頁に對して、餘りに打たれた、私は、何等の光明を認むる事が出來ませんでした、五十年の精進の生涯も、私を慰むるに足りませんでした、然し、私は、今日始めて、意味を悟りました。

矯風會は、何と申しても四十年の礎を据ゑた矢島先生を離れて、立つ事は出來ませぬ、この礎に黑點があれば、會は暗くなります、若しひゞがあれば會はくづれます、今度の告白は或ひは會を毀すかも知れませぬ、然し有る瑕疵なれば隠れて居ればなほ崩れます、私は會の生命を賭しても明かにせねばならぬと信じました。

私は然しこゝに始めて、日本の救ひを見ました、先達の有島氏の事件以來、私の心は實に、己れに對し又、日本民族の將來に對し、云ふ可らざる愛で充ちて居りました、何故に我が民族性は、この點に斯くまで弱いかと、然し今日では、はつきり解りました、弱きが故に戰はねばならぬと、性の誘は、云ひ難く強きが故に、正しき行路を拓かねばならぬと。

又私は悟りました、順なる竹崎順子叔母君の生涯にはこの種の戰ひが無かつた、然し不法の境遇に、反抗する新生涯には、特にこの戰ひが激しいと、そして今日我が新らしき女性が、踏み込み、踏み迷ひ、躓きつゝ有る先達は、實に先生のこの一頁の内に縮めて見る事が出來ると。又同時に、其救ひも、この死の蔭の谷よりつかみ得ると。

基督敎婦人矯風會は、順境に育ちし、小娘の寄合では有り

ませぬ、今日ます／＼荊棘を拓いて進まねばなりませぬ、先生の生涯のこの一頁を捨てゝ、どうしませう。
私は終に決心しました、そして先生に申しました。
「先生！　私は新らしい發見をしました」と、先生の耳はよく聞えません、お側の人々を出て貰つて、私は先生と二人きり、耳に口をつけて申ました、先生は椅子に正座して、きいて下さいました、私は申しました。
「叔母さん、私は大きな發見をしました、今日まで、お叔母さんの暗黒時代と申されたのは、最も叔母さんの苦しまれた時機で、そこに光が隠れて居る事を。
竹崎の伯母さんの如く順な生活には、この種の戦ひは有りませぬ、然しあの無法な壓迫に對して、反抗するものには、當然戦ひが來る、又同時に躓きも來る、叔母さんは五十年前に今日の最も新らしき女性が爲しつゝあることを、一身に於て爲し、躓き、かつ起きて今日まで歩み通されました、こゝに眞正の教があります、私は、矯風會の、少くとも日本の矯風會の眞隨と信ずる純潔を、振りかざして、立つて來ました、然し矯風會の基礎は叔母さんです、若し今日叔母さんが、この過去を明かにして下さらなければ、私は叔母さんの死後、矯風會の根底に地崩れが來ると思ひます又、今日有島など云ふ人々が、端から斃るゝ時に、この事を語つて救ひの道を拓かねばならぬと思ひます、默して居るのは罪だと思ひます」
この時先生は、まはらぬ口で、それでもはつきりと申されました。
矢島先生、
「云ふのは苦しい、生命がけの仕事です、然しあなたがそれをして呉れるなら、有難い！」
私は申しました。
叔母さん、私は過去の恩義に對し、私にこの事が云へる道理はありません、然し私はいろ／＼考へて昨日始めて、こゝの道理が明瞭にわかりました。
叔母も泣かれた。
私は泣き伏した。
私は涙をふるつて申しました。
「では叔母さんの口から云つて下さいますね、そしたら私はこれから、祈をこめ、生命をこめて、書いて見ませう」
矢島先生、
「はい、どうぞ、云はなければ樂だ、けれどそれでは、ほんとうではない、頼みます」
私は、默つて、おじぎを一つして下に降りて來ました、そ

して下の熊野さんの室に入つて獨り思ふ存分泣きました。助けを祈りました。

翌日再び晝食前に、先生のお室へゆきました、先生は「廣間へ行きませう」と云はれるので、連れ立つて大廣間へゆきました、こゝで又、人々をさけて先生の耳に口をつけました。

私は袋から、二通の書きものを出して、先生の耳に讀みました、第一は先生の告白です、幾度も聲が登りました、私は讀んで、お妙さんの記事になつて、どうしても讀むに堪へず、これ、どうしませう、書いてもよございますかと申しました、

先生は答へて、

「事實は曲げることは出來ませぬ」

とどもりながら申されました、

全部讀み終りました、私は、顏を擧げることが出來ません、

「こんな苦しい事は生れて始めてゞす、叔母さん、赦して下さい！」

私は顏も擧げ得ず申しました、この時先生は靜かに申されました。

「有難う、私も苦しんで、泣き沈んで、生きて居られぬと思つた事も、數知れぬ、然し苦しみは、もういゝ、今は唯感謝丈けです、たゞ一條に、なれぬ道ながら、救ひの途を辿りました、然し有難うこれでほんとうに、皆樣の前に、スッカリお詫がすんだ、私はどうなつてもかまはぬ、昨年、健次郎の夫婦が親切に來て、私の心の苦しみに、同情して、この事を云つて呉れた時、私は覺悟して居ました、今日始めて、親切に、あなたが拔んでゝ云つて呉れて、ほんとうに感謝です」

私は更に申しました。

先生、私は今までに、實際こんな苦しい事は有りません、先生、先生の恩義からしても、何う云つても私としたものが、こんな事云へる筈が有りませぬ、然し先生、免して下さい」

先生は私の手を把つて、涙の内に申されました。

「ほんとうに、赦して下さいよ、すまない事です」

私は身も世もなく、思ふさま泣きました、先生と相見てから、卅年、これ程泣いた事は、曾て有りませぬ、然し私は最後に申ました。

「先生！　これで先生の全生涯を頂くことが出來ました、これなればやれます、これからやります、有難う」

先生は靜かに點頭かれました。

大正拾貳年七月廿四日

矢島楫子敎へ子の一人
久布白落實
謹で記す

謹而逝き給ひし 矢島楫子先生の靈に申す

久布白落實

一

十四歳の秋、初めて父母の家を出で、前橋の共愛女學校へ學びました、こゝで特に英語を學べとの父からの嚴命で、特にパーミリー敎師に敎へを受くることになりました、私は規定の學課は好き嫌を云はず几帳面にやりました、然しこの特別の英語クラスには氣の進まぬのが時々ありました、この氣持は親切な敎師の眼にも見えたと見え一日パミリー師は私に尋ねられました。

「貴女英語好きですか？」

と、私は即座に答へました。

「嫌ひです」

するとパミリー師は押し返して日本語で申されました、それならなぜ勉强しますか、私は出合がしらに申しました。

「義務だからやります」

この問答が有つて間もない時でした、丁度十二月の一日私はこの進まぬクラスへ澁々出かけました、すると敎室と云つてもパミリー師と二人切りの差向ひの室で、課業が始まりましたが、どうしても口を開く氣になれません、何と云はれても默したまゝ終ひに一時間だんまりで押し通し、

「貴女お歸りなさい！」

と云はれて默つてお辭儀をしてすた〱室へ歸つて仕舞ひました、其日私は當時共愛女學校の先生であられた矢島妙子女史からの注意を受け、始めて氣が附いて夜パ師の許へ斷に行きました、然しこの時以來パ師は私に敎へる事を止められました、そして同時に女子學院の矢島先生に私を送る手續きを爲しつゝ父にもそれとなく、女子學院ゆきを勸め、かれこれする内其一月から私は終ひに女子學院の生徒となりました。

二

女子學院では私は丸切りの田舎書生でした、然しパ師の英語敎授の方法は、極めて徹底したものであつたと見え、第一リードルを終らぬ私が、夏休みまでに、第三級を終り得たまで馬力を出す事が出來ました、然しこの間中、矢島先生は、緩き手綱を固く握つて居られたのが後に至つてわかりました。

七年の間中、時々私の自負氣は起りまして、やれ科學の程度が低い

とか、日本學の力が不足だとか、生意氣の數を並べて他校の規則などまで取りよせると云ふ仕種でも、先生は平氣で見て居て、

「調べて御覧なさい、いゝ處が有るかも知れませんよ」

と云つて打つちやらかして居られました、散々してから止めた頃になつて、

「内程いゝ處はないのですよ」

と云つて笑つて居られると云ふ調子で、私は何が何やら夢中で七年を暮して仕舞ひました。

七年の間に娘心にしみ〲と解つて來た事は、先生の何事にも動じられない底の知れぬ力と、大海の如く、靜かに、然かも穏やかで、徐徐に進み行く量り難い動力です、私は學問は教室で學び、人間學はこの先生の朝夕の生活を眺めつゝ學んだと云ふ事を斷言します。

三

卒業後私は一年して、先生のボストン行きにお供しました、當時僅かに廿三才であつた私には、この先生の晴れの舞臺のお供は非常な重荷でした、然し五十日の後私は又先生の所謂啞旅行に於ける日夕と云ふ偉大な教訓を學びました、大正五年に到り私の事業に於ける先輩また同僚なる守屋東氏が、衆議を排して私を引き出し呉れらるゝに及び、私は先生の下に來つて働く事となりました。この間四分の一世紀に渡つて、私は先生の偉大さと、其止まる事を知らざる向上心とに勵されて日夕を過しました。

四

先生の暗き一頁についての知識は最近に私に參りました、私は先生の告白を大正十二年の震災前に先生からお預りして居ました。私は夙に先生の在世中に之を世に公にすべきであつたでせう、然し私は臆病でどうしても其折を見出す事が出來ませんでした、私はこゝに矢島先生の靈に向つて謹んで最後の御詫を申上げると共に、私の叔父夫婦であり、又私を父母について愛しくれらるゝ徳富健次郎氏及其妻愛子氏に對し、心からの御詫を申します、私の臆病から、矢島先生の御生前の告白も、これを紀念號りものとし、又この兩氏が、心を盡して爲られ又、それに對して先生が有たれた感謝を今日まで土中に藏めて置いた罪を謝します。

五

私共は今や、九十三年に渡る、矢島先生の全生涯を完全に私共のものとする事が出來ました、そして、この七ころび八起きの内に、終りの半世紀に渡つて、唯向上の一途を辿り抜かれし偉大なる先生を基礎として立つ矯風會が、又神の御力に倚りすがつて邦家の爲め、この時代の爲め、全國の同志と共に力を一にして盡すことあらむ事を深く祈りつゝ筆を擱きます。

信ずる事の出來る婦人

守屋東

南洋行の泰安丸に乘つてゐた、大きなスクヲールが來るといふのでとるものもとりあへず窓の丸硝子をしめた、ソフアーにかけるまもなく、其分厚い硝子が二つに割れた、

「アッ——先生がなくなられた！」

と、いふたやうなことを、私は口走つた、そして自分で、たしなめて曰うた、

「これが御幣擔といふのだ」出て來るときから氣になつてゐた先生との生別が、死別になつた時の事を思ふて引きしまるやうな氣がした。

後數日して、南洋長官橫田鄕助氏から

ヤジマジョシノゴエイミンヲイタム

といふ電報をうけた。

其時私は南洋のポナペ島田中金三牧師の家に在つた、丁度六月の廿一日、夕刻椰子の樹間に月の出るには間のある時分心地よく一日の汗を湯にながして居た時であつた。

まさのが、泣きだした、私は泣かなかつた、只ジット裸のまゝ眼をとぢた。

打ち込まねばならぬ大きな大切なくいが、音もなく强い力で地の中に眞直に打ち込まれた時のやうな感じがした、そして私の氣持は全く空虛だつた。

靜かに湯から上つた、食堂を通る時、夕食の仕度を手傳つて居られた田中牧師が、

「矢島先生がなくなられたさうですね！　明日の旅行はどうなさいますか——」

と。

「參ります、島巡りをいたします、それは先生の滿足ですから」とお返事した。私の心は矢つ張り空虛だつた。

丁度ポナペにまさのを訪ふと言ふ事を決してから後、どういふものか先生にその話をテキパキとする勇氣がなかつた。二ケ月間の生別に對して言外の不安があつた、まさのの靈の慰は私にとつて責任のある問題であつた。また若いどの點にも未熟なまさのが、心を決めて南洋に——田中家に働きに行つた事は私としてあくまで責任をもつて援助しなければならぬ事であつた、そして三年の間には必ず行くと言ふた約束があつたのだ。その三年はやがて終はらうとして居るとき、

約束を果たさなければならない私は思ひきつて長途の旅に上つた、此旅は二ヶ月全く音信が出來ない、二月といへば隨分變化のある事は知れきつて居る、それに梅雨がある、弱いものには障りの多い時、先生は此梅雨に、と、思はないでもなかつた、四月廿四日のお誕生と、銀婚の大典には無事でお祝したいと、斯うした事を口外される事の少なかつた先生が、人毎に其希望を述べてをられた事や、御自分自身に、老た身を躊まつて規則正しく靜養される樣は何かしらす私の旅心を靜かなものにして居た、ボナペにつくまで二三の島に船はついた、いつも何事も變つた通信が送電されて居らなかつた事を感謝して旅をつゞけて居た、丁度ボナペについて三日目に先生の訃を知つたのだつた。

まさのは、すまない〳〵と泣いた、「私が悪いんです、矢島先生のお最後に先生がいらつしやらないやうな事にしたのは――」と泣きぬいた、私は慰めた、そして言つた、「それ程私に氣の毒と思ふならどうかシッカリした人になつておくれ、お前がシッカリした人になれるために私も先生のお最後にあへなかつたと思へば有難いから――」と。

私は先生の死について思ふより生涯先生と生別のまゝ旅して居る氣が一杯だつた、先生の靜かなあの寢顔、お別れした時、「有難いことです、いつていらつしやい」と仰つしやつた聲、柔かい手、それが先生と私との最後であつたのだ。

先生はまだ八十四五歳位のお元氣だつた時分、よく仰しやつた、「私は誰も居ない靜なとき死にますよ、皆が居て騷がれてはたまらない――」などゝ冗談を仰つしやつた、私は冗談に和して「死んでから、どうしてお棺に一人でおはいりになるでせうか――」「飛びこみますよ」などゝ仰つしやつた、それも旅で思ひ出した。

先生と私達位生死の事を平氣で談しあへたものは少ないだらうと思ふ、「先生がお死になつたら頭をぜひ解剖させて頂くのだ――」とは藤井さんがいつも言つてをられた、それも先生に向つて。

また何か一寸した談の中にも御遠慮なく先生の死といふやうな言葉は先生の前で誰も彼もつかつた、知らない人は時々「お氣にかけにはならないのですか」とたしなめられる場合さへあつた、でも先生は生死は全く超越して居られた。

一九二〇年ロンドンで矯風會の大會が開かれるといふ時まだ先生は會頭だつた、歐洲大戰後初めて開かれる大會、世界の平和――人類の幸福と重要な問題の論議される會合に日本を代表して行くべき責任の位置にあつた、先生は案内が來たか

ら會頭として行くべきだから行くと八十八の老體で宣言された時其時の常置員會は大反對をした、其最も強い反對の理由は高齡の先生を長途の旅に出して若し途中どうかした事があつては申譯がない――といふのだつた。が皆が熱して來た時――言葉は露骨になつて――若お死になる樣な事があつては――と言ふた、座談の時でなしに眞面目な會議の時斯うした言葉を強く使つてゆかなければならぬ程先生の決心はつよかつた、ゆくと言はれたきり皆の議論を無言で聞いて居られた先生は最後に死の問題が明に提示された時、「それ程おもつてやつて下さらないと行かない中に死でしまひますよ」と。

皆も先生の決心の動かす事の出來ない事を知つて心をあはせて先生の旅の用意にかかつた、此時是等の話を江原素六先生に申上たとき、江原先生は涙ながして感謝された、そしてロンドン行の旅費調達について江原老先生は心から御盡力下さつた事を思ひ浮べる。

田島牧師はまた案じられて若しもの場合の責任者を明に定めておいて頂きたい――斯うした問答は各處におこつた、先生は無關心のやうに、行く事を承認されて滿足して居られた。

大戰後の英國婦人に對し、「悲しみの家に入るは喜びの家に入るにまさる」との詩篇の言葉を以て先生は旅だたれた、然も御無事で、歸路は愛孫きよ子氏を同伴されて加州沿岸の同胞を訪問し矍鑠として歸朝された。

先生御自身生死を賭して進まれた事は決して少なくなかつたと思ふが、私として其光榮あるお伴をしたワシントン會議の開かれた時、平和の使として、單に祈の旅としてゆかれた時の先生の六ヶ月は實に尊いものと思ふ、全く先生は生還を期してをられなかつた、ゆくときすでに醫師からは旅行は免されぬお身であつた、特に心臟がよわつて居られた、弱つて居られるときでも、弱つて居る事を發表されぬ、弱いなりに自重されて居つた、任は重く健康は薄氷のやうな先生によくもよくもお伴が出來たと歸つたときに思ふた、然し行くとき其途中に於ては先生の信仰は弱い私まで引きたてゝをつた、先生は一日路を以て足れりと實行されて居つた。覺めて翌日に至れば、「今日もまた生を以て神の前に働く事を感謝する」と祈られる、夕に至り、ふしどに入る前にはまた「神樣今日も一日を終らせて頂きました、御心ならば明日も生かして働く事を許させ給へ」と祈られた、其祈は厳なものであつた。同行のタッピング夫人なども先生の此祈りにはすべてを捧げて働く決心を持つと言はれた、然し何といふても晝間多い時は五つ位の會合に出席し數千の人々と握手し、話されるのであ

るから先生のお勞は言外だつた、夜幾度先生の寢息を案じてそつと先生の鼻に手をかざして見たかしれなかつた。

歸路シヤトルに着てから先生は「ぜひ生きて歸らなければ――」といふ言葉を出された、加州は特に寒さが强かつた、使命を果して船に乘つた、ハワイでも上陸し講演された、然し隨分勞れてをられた、船中二三度倒れやうとされた事もあつた、横濱に着いた時、「船から降りる時はあなたに手を引いてもらひますよ、いつまでもこゝで待つて居ますよ」と仰つしやつた、なぜかわからなかつた。が、荷物の事、税關の手續凡てすませて船に歸つたとき徳富夫人と談してをられた先生は「すみましたか、待つてゐましたよ、ゆきませうか」と言はれた、私はいつものやうに手を組んだ、そして舷梯子にかゝつた時、先生は「守屋さん生きて歸りましたよ」とシツカリ組んで居る手に力を入れられた、私は初めてホツトした氣がして淚が出た、これが仰つしやりたかつたのだとやつと氣がついた。

三日目に大患にかゝられた、それもふしぎに癒えられた、そして九十三歳まで全く平和な先生としてあの恐ろしかつた大震火にも無事に人々の愛の手に天壽を全うされた。

先生は生きて今も指導して下さる。

先生の側にそつて一番氣のつく事は老人といふ事の見えない事であつた。また一日〳〵進歩してゆかれた方だつた、決して怠らぬ日常をすごされた、そして全く神にゆだねた生涯を通してゆかれた、またいつも罪人であるといふ事を認識されて居られた。

私が先生を知つて師事したのは漸く最近の二十年にすぎない、先生について底知れぬまで湧き出づる泉を求めて汲まんにもくむべきうつはのない私は、甚だ識る事の少なかつた事を残念に思ふ、只、自分のうつは相當に識つた先生の人格は、信ずる事の出來る婦人であつた一事である。

四海みなはらからなりと今ぞ知る
へだてなき世は關もとざさず

――楫子

偉大なる死

村岡花子

この詩は去る七月婦女新聞の請に應じて、同紙の矢島楫子號に寄せたのでございますが、ここにもう一度載せて、先生を偲ぶよすがと致します。

噫倒れた、大なる木は倒れた、
百年をその幹にひそませた
大木は倒れた。思へば遠い昔
さまざまの害蟲は若木を蝕うた、
地はもろもろの禍をその根元に注ぎ込んだ
けれど、木は遂に生きた、
武器は唯一つ——生命に對する執着、
（おおそれは尊くも强い執着であつた）

かくて成長の光は呪の暗を拂つた。
大樹の耳には絶えず
天上の樂の音が響いた。
旅人はその下蔭に寄り
鳥のむれはその梢にいこうた。
枝の上に翼を休めた鳥のむれは
刻一刻にも伸びつつあつた大樹と共に
刻一刻に天空に近く導かれた。
（おお祝福された生存よ！）
神は汝を地と天空の間をかよふ
梯子として用ゐたまうた。

日毎夜毎に大空の榮を語る
大樹と共に在つて、
小鳥のむれは天上の清らかさ
安らかさを地上にもたらしたい
祈で滿たされた。
かしこここと人の世を飛び舞ふ時
彼等は餘念なく平和と純潔の歌を唱うた。
今靜々と大樹は運び去られて行く、
（おお力强き、活氣の滿ちた安息よ！）
久遠の生命の流より
百年の齢を汝に借した
造物主を私は讚美する。

マグノリヤは枯れはてました

浅田みか子

始めて先生の御世話になつた時から、御臨終の床の側に侍りし時までの間には、四十年の長い月日が流れてゐます。思へば長い歴史であります。其間私は先生の影に付添ひて、今日に至りました。此短文では迚も何も書くことは出來ません。たゞ始めと終りとに一寸筆を染めませう。

私が十四歳の春始めて櫻井女學校の門を潜り、先生の御部屋に置いていたゞいた時は、腕白盛りの嗣子四郎さんと御一緒でした。四郎さんが、魚を捕りたいから、網を買つて下さいといはれた時に先生は、網をすくことを知らないで網を持つても、破れた時修繕が出來ないから、まづ網をすくことを覺えなさい、河に臨んで魚を羨むよりは退いて網をすくに如かず」といふことがあるでせう、といはれました。それから四郎さんは毎日先生から網すきのお稽古を授かりました。愈々習ひ得た時に、網は買つて與へられました。それから夏休みになると、先生と四郎さんと三谷さんと私とは、上州入の湯に出かけました。汽車が碓氷峠の麓に着くと山登りに掛りました。先生は御駕籠に乘られ私共は下駄で歩きました。先生は其時、「おみかさん此下駄の方が歩きよいよ」と仰つて黒天鵞絨の鼻緒のすがつた先生の東下駄を渡されました。私はそれを遠慮會釋もなく穿いて歩き散らし、口が乾いた時、湧き出づる清水を見附けて、水中に飛び入り、水を飲み下駄の疊までびしよぬれにして又歩き廻つたものですからたまりません。ぬれ下駄は砂塵にまみれて汚れるから又次ぎに來る溪流に飛び込んで洗つて又同じことをくり返し、入の湯に着いた時は、先生の東下駄は腐つて仕舞つて、又物の役にも立たなくなつて仕舞ひました。先生は笑つて居られました。

其後は數年間、先生と同じ寄宿舍に寢食を共にして、種々の御世話になりました。

二階の先生の御部屋の窓の下には大きなマグノリヤの樹が繁つて居りました。皆がいつも其樹の蔭に立ちよつて、恰も先生の懐に抱かれて居るやうに思つたのでした。或人々は先生を光線々々といつて、お眼の光りを逃げかくれしたものですが、私はそれほど恐怖く思ひませんでした。私がいよ〳〵女子學院を卒業して、他の地方に參り、夏休み毎の往復にはいつも寄宿舍を訪づれて、先生と同じ寢臺の上に寢かしていただいたこともありました。

先生が八十歳を越えらるゝ時、老年の故を以て、女子學院を退かれた時は孤獨の想ひに、皆がどんなに悲しんだことでせう。其御部屋が空になつた後に、さしも繁つて居たマグノリヤの樹は、あはれ枯れはてゝ仕舞ひました。

婦人矯風會の本部に居られた先生は、大震災で燒け出されて、大久保の婦人ホームの矢島寮の二階のベットの上に病臥さるゝ御身となられました。御臨終に先だつ十日程前に、私は美しく咲き亂れた花を持つて先生のベットに近づいた時、先生は兩手を擴げられて、温顏に涙をさへ浮べられ「オ、」といはれて其花を喜ばれました。看護婦は挿した菖蒲の花の枯れた花瓶を持ち來つて、先生これと代へませうねといつた時、滿足の喜びにうなづかれました。其時の温顏は慈母の愛を思はしめ、其時の神々しいお顏の光りは、神の清けさを感ぜしめられました。

鳥の將に死なんとするや其聲悲し、あたりの氣配は何かは知らねど私をほろりとさせましたが、圖らざりき其後旬餘にして先生の御最後に接せんとは。

今は花瓶の花も御臨終の床の側に萎み伏して居るのでありました。あはれマグノリヤは枯れはてゝ仕舞つたのであります。

故矢島先生を偲びて

女醫　藤井かう

衞生の方面にも先覺者

敎育、矯風、社會事業等あらゆる方面に於ける婦人の先覺

者として敬慕されてゐらつしやる先生は、亦衞生の方面にも人に卒先して特に細かに注意をされた事は實際であります。

始終承つた御話の内にも、

「一つの仕事をなし遂げるには何と云つても身體の健康が第一です。身體が弱いと權利がありませんよ。又上京後隈川宗悦と云ふ御醫者樣が、眉を削つたり、歯を染めるのは衞生に叶はないと申されてから、その後は人に笑はれましたが歯も染めず眉もたてました。靴をはくのも人のまねをするのでなく身體の姿勢をよくし、又歩きよくて下駄の鼻尾の切れるやうな不便を避くる爲にはき、婦人靴では足が縮みますから兵隊のはくのを用ひて子供等に馬鹿にされた事もあります」などと、如何にも衞生から見て當然のなされ方と存じます。

衣服の事でも御身體の暑さ寒さに應じて人の着ない時でも帷子をめしたり、又毛絲をめしたり、すべて身體本位で周圍の人の習慣に捕はれる事はなさいませんでした。

洋行前のお支度はと尋ねますと、身體を強くして病を防ぐ事、その中に歯と眼の治療をも含むとの事でした。御食事でも贅澤はなさらず、御身體の健康を維持するに適當な物を攝られました。先生の御好きな物は自然衞生に叶つてをりましたのです。

マッサージの有功を認められた

女子學院在學の折、毎週一度宛先生の御身體を何となしに揉んで上げましたが、それが今日御役に立つとは夢にも思ひませんでした。神樣のなさる事に無駄はないと存じます。

私が醫師の前期試驗を受けに參りました時は、先生丈の許しを得て二三日休學致しました、その時に先生が辨當を作つて下さつた事を覺えてをります。「ツルーさんが生きてゐたら婦人の醫者を喜んで歡迎なさるだらうに」と申されました。

その後矯風會皆樣の御祈りの結果、大正五年六月十五日に醫師の免狀を下附され、その日に先生は尊い御身體の治療を私に御任せになり、死亡診斷書をかく事迄御申し附けになりました。(この度の御發病が恰も六月十五日。何か不思議な感が致しました)無經驗なる私はこの御信頼により非常に奮發心を與へられ、研究を進めるやうにして頂きました結果、舌をもんで御口がきけるやうになり、神經性の動悸も背中をも

んで其發作を止める事が出來、之を多くの方々に應用してどれ丈盆をしてをるか分りません。其他只今私が藥を用ひず、いろ〳〵な病氣を治してをりますのも、先生の御身體によつて實驗させて頂いた事が多いのでありります

此の摩擦治療を家庭に應用すれば、家族の方は健康になり主婦の外出も安心して出來、又一方には子女の入學難も防ぐ事が出來ますので、婦風會の如き婦人の活動を要する會員の方々には、一度講習を御受けになつて頂きたい。之が先生平素の御希望でありましたのです。御臨終の際まで、唯一つないつや〳〵した御からだで少しも藥は召上らず、注射もせず只自然の儘に御約束の通り御手を握らせて頂きながら、ほんとに安々と御永眠なさいました。今や先生は眼に見えざる澤山のおかたみを衞生の方面に、治療の上に殘して下さいました、今後も藥で效果なき幾多の病人が癒さるゝ事か分りません。

先生は婦人の權利を高むる爲に、女醫の診斷書を御望みになつたのです。何と有がたい事でございませう。私をこの役に當らせて下さいました事を先生及び會員の皆樣に御禮申上ます。

この折を記念に、新報紙面の許さるゝ範圍に於て皆樣の御參考までに家庭衞生に必要なる摩擦法につき每號述べさせて頂き度い考へでございます。

「ツルーさんの爲された事を顧みますと實に偉い人でした。先見の明ある人でした。日本の信者に働きを數へた人でした。今の名をつければ社會事業家と云ふのでせう。傳道々々と云ふよりさきに傳道して行くのです。遊戯かお稽古かと思ふてゐるとそれが立派な聖書の組でした。

私がツルーさんから受けた感化は實に大きいものでした。私の生涯の中心はこのツルーさんにつくられました。おかしいのをおかしい顏もせず、遠くから廻しかけて數へないで質れる人でした。うつかり答へたら大變なものでした。自然注意深く起居する事を數へられたのです。くだけた人、開けた人でした。

斯うして私は自分の室に恩人と共に終りまで住みたいので寫眞を掛けてゐます。この寫を見て、自分の足らない處を顧みます。信仰の厚いけなげな婦人でした。實に私の恩人、又矯風會の恩人です。」

――矢島楫子傳より――

矢島先生の思出

──會員から寄せられたもの

◇赤坂支部會員　本多　てい

矢島先生矢島先生と云ふ御名前は我等の口に幾千度唱へられしものならんか、實に我國の婦人として否世界の婦人としても、矢島先生の如く多くの人に其名を呼ばれし婦人は稀なるべし。之其高齢の點より、其事業の廣き點より、其勤勉の狀態より、一として人の師表たらざるものなければなり。宜なり我皇后陛下の此無位無官の一婦人に對して令旨を下し金品の恩賜に浴せしめられしこと一再に止まらざりし事その光輝ある功績は燦然として世を照すべし。

矢島先生の偉大なることは其素質に於て非凡なるは云ふに及ばざれど母堂の薫陶大に優れたるもの有りし事は特筆すべき事なり、其教育法の一端は婦人新報に記載されたれば玆に贅せず、只或時先生の能書は何れより來るかをお尋ねせしに、私はどうしても母の様な字を書けませんと云はれたり、先生の櫻井女學校の校長として來られし頃教員も生徒も寢靜まりし深夜洞ランプの下に習字を勉強されしを見たる者も多からん、之母堂の優れたる標準に向つて進まれし者ならん。

赤坂靈南坂の牧師小崎弘道氏の芝愛宕町新橋近傍に傳道を始められんとして其御宅に新會を開かれし事ありしが、先生は番町より愛宕町まで行かるゝに往復とも歩行せらる、自分は未だ年若き時代なれど大儀に感ぜし事無きに非ざりしも、先生は何時も先立たれ勵まさるゝに由り、怠け得ず、御一緒に行くと云ふ有様なりしも、小崎先生の御勸話を聞き、御祈禱に感銘し、歸途は參會せし幸福を感謝し、歩調も輕く知らぬ間に校門を入ることなりし、それより大抵先生のお部屋に這入り込み、空腹を充たす爲め度々珍奇なる御馳走に預りたり、或時はコチノヽに固くなりしカステラを捜し出し、カステラのお茶漬を食べませうと云はれしことあり、或時は茹でたるウドンを用意せられあり、牛乳に砂糖を加へ其中にて煮てお相伴せしこともありし、思ふに先生は貴き寶の糧を與へたればそれにて滿足すべきだと突き放さるゝ如き冷たさは少しもなく、肉の缺乏をも察せられ、其を充たし完全なる悦びを與ふると云ふ主義を持たれしことと思ふ。故に其師弟の眞情誠に涙ぐましきもの多々ありしなり。

先生は男氣に富む方であると云ふ事は八十八の高齢を以て海外に渡航せられし一事を以て充分證し得るなれど、私の胸に抱く一事を皆様にお知らせ致したいと云ふは、先生のお供をして清浦氏の御宅に行きし時、先生はお友達の如く自由に話されしも、小心なる自分には先生の陰に隠れて一語を發し得ざる有様にて、只管先生の勇氣に驚きたり（清浦氏は内務或は司法大臣なりしならん、其頃大臣と云へば廣大なる權威者にして平常人とは大なる懸隔あるものと思ひしなり）

先生は衞生に注意せらるゝこと篤く常に葡萄汁を用ひらるゝことや、起床時就寢時に缺かさず鹽湯を飲まれしことや、藤井女醫のマッサーヂを受けられし等、多忙なる事業に從事する者の範とすべきものならん。

◇山陰部會長神戸婦人同情會長　城　のぶ

私が矢島先生に初めてお目に懸つたのは明治二十六年十月、京濱婦人新聲會が新榮教會で開かれた時の事でした。爾來三十二年間先生の容顔と御指導を蒙つた一人であります。

私は書きたい事は澤山ありますが紙面が許さぬでせうから一二を書かして戴きたい。

先生のあの如何にも鷹揚な落ちついたゆつくりとした御態度は、聖者を偲ばしめた、高

き御人格に接した私は深い感化を受けました。

先生が基督教的信仰の上に立脚されて半世紀に亘る長い間生命を打込んで築き上げて下さつた婦人矯風會、純潔、禁酒、社會改良、婦人の向上、凡て今日の發展を見るに至つたのは先生の熱と涙と祈りとの力より出でた尊い現はれであると思ふ時に、心より感謝を捧げずには居られぬのです。

先生は日本の婦人が何う云ふ點に悩み苦しんで居るかと云ふ事を知つて居られた。卽ち酒と賤業婦のある爲めに家庭に大なる打撃を受けてゐると、當然として一方賤業を營んで居る婦人を救ひ、解放すると云ふ事と、一方男女の貞潔を高調され、着手された其時代から考へてもやはり先生は偉い先見の明があつた。

私をして一層矯風會なり禁酒廓清問題に生命を捧げしめた動機は、先生の賜物である事と感謝するのです。廓清會の生れた當時、公娼廢止を高唱された時、先生は葬式費迄運動費の爲め捧げられたと聞いた時、私の心に非常な感激を與へられた「一切を捧げて」と神に誓つたのも此の時であつた。

先生は眞の愛國忠君の實行者であられた、神を中心とし、敬虔の念より迸り出でた熱あり血あり誠ある、尊い皇室に對する、燃ゆる熱情は昔の志士の俤があつた、今日若き人々の學ばせらるゝ事がこゝにも見出される。

私が現に經營して居る婦人同情會、其名稱も先生によつて命名された、先生は山上の家と仰しやつた忘れられぬ尊い記念となつた。

先生は凱旋して神の國へお歸りになつた、今其の御遺志をついで少くとも先生の理想を實現せしむる爲めに益々精進せんと誓ふのである。

あゝ日本のウヰラード女史、日本の婦人の先驅者、神に忠實な聖徒は逝かれぬ。

四月十八日本部に先生を御見舞した時、堅き握手を交はした時が地上に於ける永久のお別れとなつた。誠に御名殘惜しき事である。

謹んで誌す。

宮城縣下水害地御慰問の思出

仙臺支部長　北野とらよ

明治四十三年の夏のことでありましたが、私共の居まする宮城縣下は大洪水でありました、而かも鳴子と申す溫泉のある地方では、山崩れで浴場の家が倒されたり、流されたりしまして、多くの人命を殞しました、其地方より流れ來りました濁水は硫黄分を多量に含んで居りましたので、其れを被りました田の稻は全部腐敗しまして見る影も無く田の底にヒタヒタと付いて腐つて居ました、其稻作の損害を受けた許りでなく全村水に浸され、家の内に棚樣の物を造り辛ふじて其上に寢起きして辛つと生命を拾ひ衣食に窮して居ました村に遠田郡内竹谷といふ所がありました。

此年の夏矢島先生は仙臺の或る家に避暑旁お住居に成りましたが、恰度此水害の時でありましたので早速救助のことを東京にいつておやりになりましたと見えまして、多くの救助品が到着しました、隨分其時も御老齢でありましたが、御自身に水害地を訪問して其救助品を家々に配りたいとの仰せでありましたので、其方法等の御相談にあづかりしましたので、早速良人と共に調査に着手しました。

宮城縣地方課長高城氏より被害地の損害や狀況を詳細に知らせて頂き、警察部保安課長内田氏よりは各地より來れる電報報告を親切に示されました。

八月三十一日午前八時十五分仙臺發の汽車で先生のお供を致しまして良人と共に三人で右の被害地に向ひました、鐵道が流されたり曲つたりで汽車不通の箇處もありますので、鹿島臺驛より八町手前の地に下車致し、船に乘ること二町許り、慰問品の到着を待ち、二

人の女人夫を雇ひまして、携帶の米、衣類、手拭其他諸種の品々を負はせ、先生には泥濘膝を沒する様な小路をもお厭ひなく二十七丁を御徒歩になりまして、其地駐在所巡査の案内を受け、家々に其義捐品を御配付に相成りまして、再び前路を御徒歩、午後六時頃御歸仙になりました。

矢島先生を憶ふ

新潟支部長　小出チカ子

私が初めて矢島先生に接したのは明治二十年の秋で私の十四歳の年であつた。

當時丹高田には基督敎の私立高等女學校が始めて設立せられ、先生は態々其學校の用事と婦風會の用事を兼ねて高田へ來られた様に思はれる。私が先生を知るに至つたのは其時の先生の熱辯に動かされてからである。其演說は婦風會設立の演說會で、今日から言へば婦風會高田支部の發會式に外ならなかつた。私は昨年十一月婦風會新潟支部を設立したが高田には當時既に支部が設立されて居たのである。先生が始めて婦風會を創立せられたのは明治十九年と承つてゐる、そうすれば高田にはその翌年に支部設立があつた譯であるから、支部としては恐らく最初のものであらうと思はれる。當時先生の主要は主として基督敎主義に基く禁酒廢娼を提唱されたのであるが、私の今尙記憶に新らたなのは先生が當時既に婦人の頭髮の改良を叫ばれた一事である。私は偶然にも其際束髮を結つてゐたが、先生は日本髮が衞生、經濟、時間等の點に於て束髮に劣ることを一々ヒンを拔き取り一同に示して論證せられたので、來會の丸髷島田の連中は顔色が無かつたのである。私は若年ながらも先生の演說に共鳴し、其場で婦風會の一員と成つた。其時私の感じた第一印象は、先生は情熱の人と言ふよりも寧ろ理智の人であり、意志の人であり、威嚴の人であると言ふ事であつた。其後私は先生の女子學院へ入學し親しく先生の薫陶を受けたのであるが、當時私共は、先生に「光線」と言ふニックネームを奉つてゐた。是は先生が人の心の奥底迄も見通す様な或る鋭さを持つてゐられた事を表はすもので、先生の性格の一斑を示すに足るものと思はれる。

今から考へて見ると、私が新潟支部を設立したのも決して今日偶然に起つた事では無く三十有餘年の昔先生の高田に播かれた種が今漸く新潟に芽生えたのであることを思ふ時、私共は先生に對し喜びと感謝の念を捧げずには居られない。

矢島先生の思ひ出

財務部長　小泉たね

明治四十年頃かと思ひます、上州安中に婦風會の部會が開かれました時、私は司會者として全會に「會場の靜肅を保つ爲め耳語やお久振の挨拶などは總て司會者にお預けになつて御講演中御靜かに願ひます」と申した。すると先生はすぐ代つて講壇にお立ちになりまして、劈頭「司會者から嚴重なる御命令云々」と特に其嚴重に力を入れられた様で、私は何と云ふ皮肉な先生だと思ひました。其後數日を經て御目にかゝりますと、「凡そ人を御するものはあまりパキ〳〵してはいけません、あなたなぞも注意なさい」と暗に私の出過ぎ振りを警告されました、その御言葉は常に私の耳に殘つて居ります。

それから先生が八十九の御高齢にてワシントン會議に自ら進んで御出になる事を承り、あゝ、もうお止めになればよいにと家庭の食卓で申しましたら、つひ一度も親しく御目にかかつた事もない主人が、それはお前の誤り、先生なればこそ米國にも歡迎され、日本からも喜んで送る事が出來ると私を戒めました、その時を思ふと今でも先生にすまぬ事と密に

御詫びし、同時に主人がよく先生を理解して居た事を感謝します。

矢島先生の死を悲しみて

大阪　岡田　美壽

國を愛し人を愛し人の德をたてんとして日夜孜々として東奔西走し、殊に海外に迄も渡つて種々盡力して下さつた我が大日本婦人中の大偉人矢島先生は老齡の故を以て遂に此世を去られた事は誠になしむべく悲しむべき事であります。

私は四十餘年の久しき間先生より一方ならぬ御愛護を蒙りながらいまだに其萬分の一をも果し得で此悲報に接し何とも例へやうもなき淋しさと悲しさを感じました。

然し私は日頃先生から受けて居ります御忠告もあり且つ自分の意志を果たさんものといささか形にかかりながら社會事業の一端を始めて居ります爲め、追い取りまぎれ平素は心にもなき御疎音にのみ打ち過して居りましたが寒暑のお伺ひだけは只今迄も續けてまゐりましたが、今年からはそれも叶はずなつたとは何とした悲しい事でございませう。

誠に先生は慈母よりも深い御愛心から相見まゐる毎に何くれとなく熱心に教へて下さいました御忠告は最も貴き愛だと信じますから常々感謝を以つて實行致して居ります。

人多き中にも眞心から忠告して下さる方は尠いものであります。

其故に私は何誰樣でも眞心よりの注意を戴きました事は一言半句たりとも誠に有り難く受けて忘れ得ぬ性質の者でございますれば、まして先生の温い愛の泉からほとばしり出た御注意は忘れんとしても忘れ得られぬのでございます、されば生命のあらん限り否後の者に迄も守らしたい決心でございます。

諸姉の中には御同感の方も多からんかと信じます、どうかお互に守りたいものでございます。

◇

山陽部會長　呉支部長　十時　菊子

私は矢島楫子記念號について筆を取り始めましたが、餘り長くなり過ぎ、婦人新報記者の御希望に反する樣になりますから、此度は御遠慮致す事とし、短き言葉に於て心持ちをいひ現す事に致しました。

うつせみのもぬけのからをぬきすてゝ、たまのみこころもきるそたうとき

なてし子の花は盛りと咲きそめぬ、やがて結はん實をは待ちつゝ

四海みなはらからなれは和らくは、去りにし人の心なるらめ

人みなの救ひのために盡さなん、過ぎにし君のおしへまもりて

人數にかそまへらるも年久の、みたまのふゆによりてなりけり

矢島先生

赤坂支部長　山東　泰子

勝ときをあけてみ國に入りましゝ君のみあしのあとをこそふめ

弔電並に弔辭を寄せられし人々

弔電

東洋英和女學校、小山氏、木下支部・天盟禁酒會、濱寺婦人會、大邱基督敎會、ウヰルミナ女學校、同志社女學校、久保村ノブ子氏、留萌支部、元山キク子氏、今治支部、博多支部、平塚支部、臺北支部、名出氏、禁酒評論社、ピーフオード氏、城のぶ子氏、稻葉千代氏、相川氏、齋藤谷子氏、芝原氏、三澤ムラ子氏、東ます子氏、中島小春氏、岡村いほ子氏、門田氏、櫻井氏、新潟支部、ヤマサツ氏、太田支部、荒木トミ子氏、高松支部、鞍山支部、金澤支部、四日市支部、京都支部、城戸順子氏、丸龜青年部、藤野ヤス子氏、富山支部、小橋氏、渡邊善太氏、星島二郞氏、鈴木菊子氏、高松つた子氏、同ゆき子氏、近澤氏、吉村世一郞氏、久保マチ子氏、山村靜子氏、鈴木七子氏、赤尾氏、下關支部、綱島氏、横田とみ子氏、永島氏、中山フジエ氏、川瀨氏、横川ゐくゑ氏、多田なみ子氏、井上モト子氏、永澤氏、山本氏、齋藤字一郞氏、高木氏、平澤ヤエ子氏、島田初子氏、佐藤善哉氏、遠藤タメ子氏、宮津支部、仙臺支部、福岡支部、磐實支部、八幡支部、淸水たね子氏、臺中支部、西岡みか子氏、安東支部、末永氏、高知支部、瀧川支部　廣島支部、松代支部、堅山スガ子氏、札幌支部、大阪朝日新聞社、八幡支部（九州）、テイト氏、松田愛子氏、小倉支部、大連支部、ブセル氏、岡田キク子氏、西野貞子氏、竹崎八十雄氏、手塚氏、臼田うめ子氏、甲府支部、瀨尾逸子氏、横濱聯合婦人會、廓淸會群馬支部、パミリー氏、北陸女學校青年部、永田有子氏、木村かめゐ氏、岡部太郞氏、福岡女學校、福山支部、竹內氏、中村ヒサエ氏、門司支部、遺愛女會校、小緻田ヤス子氏、中村なほ子氏、富山少年禁酒軍、安藤しん子氏、別府支部、島倉氏、岩手禁酒同盟會、宮尾氏、活水女學校、天滿敎會、木原氏、服部澄雄氏、長野縣丸子敎會、名和セイ子氏、二宮ツサ子氏、青森支部、山田ヤエ子氏、杉田いそ子氏、堅內氏、山谷タエ子氏、木村サダ子氏、小泉新太郞氏、鹿子木つや子氏、久留米支部、上總禁酒會、大阪支部、森山トノマル氏、山田氏、廣島女學校、藝西支部、小野ヤス子氏、渡邊氏、加古川支部、札幌支部、西しげ子氏、吉岡好郞同道枝氏、神戸少年禁酒軍、梶川氏、吉田つる子氏、芝モト子氏、佐々木よし子氏、市村サジエ氏、飯田いせい氏、ベドン氏、甲府支部、岡田みす子氏、川田氏、山川氏、近澤氏、ブール女學校、大井氏、宮越氏、大賀氏、成澤氏、宇佐美氏、河野せい子氏、竹口ヤス子氏、岡田氏、神戸女學院、和田とみ子氏、黑田フユ子氏、旅順支部、辰野支部、木下耕作氏、熊谷氏、馬場氏、佐渡中央禁酒會、函館禁酒會、稻葉氏、平壤支部、仁川支部、高崎支部、吳支部、京都支部、弘前支部、山室軍平氏、齋藤宇一郞氏、川田光子氏、小樽支部、高知支部、佐々木民子氏、坂出支部、前橋支部、郡山支部、京城支部、神戸支部、十時菊子氏、大連支部、臺北支部、水戸支部、奉天支部、松本氏、渡邊常子氏、岩根氏、五十嵐なみ子氏、田中金三氏、守屋東氏、九州部會、小山房持氏、湯淺八郎氏、同淸子氏、渡邊順子氏、竹崎末雄氏、香港支部、萬國婦人矯風會大會、金澤青年部、靜岡支部、川江みわ子氏、大邱支部、長春支部、熊本支部、廣島支部、釜山支部、名古屋支部、德山支部、上海支部、山口支部、室蘭支部、加古川支部、堺支部、志木支部、洲本支部、福良支部、土浦支部、鹿兒島支部、旭川支部、臺南支部、岐阜支部、佐世保支部、姬路青年部、倉敷支部、松山支部、明石支部、米子支部、若松支部、笠岡支部、鳥取支部、鎭南浦支部、下關支部、高松支部、岩見澤支部、横濱支部、伊勢崎支部、前橋支部、奈良支部、丸龜支部、旅順支部、須崎支部、和歌山支部、富岡支部、近江八幡支部、撫順支部、大分支部、岡山支部、大牟田支部、津支部、福井支部、盛岡支部、天鹽支部、美馬支部、大阪支部、聯合會、札幌支部、西松愛子氏、濱谷氏、クロリン氏、柴田みほ子氏、中山氏、熊本支部、金澤支部、濱松支部、安中支部、宇都宮支部、富山支部、神戸青年部、尾道支部、門司支部、篠山支部、高梁支部、別府支部、大津支部、原市支部、野付牛支部、秋田支部、德島支部、百合子氏

弔辭

內務大臣若槻禮次郞氏、長橋政太郞氏、ウヰルミナ女學校、星野房子氏、井上文慈郞氏、大石靜雄氏、高橋鐵子氏、古賀鮮二氏、岡山禁酒會、河本乙五郞氏、關屋貞三郞氏、高田てつゐ氏、林龍太郞氏、宮川經輝氏、住谷天來氏、同とも江氏、新野恒子氏、増永信三郞氏、佐伯貞子氏、江指卯之助氏、荻原信行氏、牛田まつ子氏、佐藤明仙氏、永島與八氏、全國女子學生聯盟、中島氏、鷄崎庚午郞氏、長尾半平氏、日本基督敎聯盟、日本赤十字社々長平山成信氏、婦選獲得同盟代表中澤美代子氏、廓淸會理事長安部磯雄氏、白十字會々長渡邊暢氏、大脇萬治郞氏、金澤甚綾氏、右田利一氏、甲府支部、矯風會全國部會長代表十時菊子氏、矯風會全國支部代表渡邊常子氏

我等の部會

○四國部會報告

六月十日より十三日までの第三回全國勤儉強調週間には四國部會一齊に何か大きな働きをと存じましたが時日が切迫致し其準備が整ひ兼ましたので、せめて香川縣下の三支部聯合にて禁酒禁煙の宣傳を致さんと、坂出支部高松支部丸龜支部へ御相談致しました處御賛成を頂き喜んで一致協力して働く事になりました。それで大阪支部の國民教育ポスターを參考とし香川縣の統計表を加へ宣傳ビラ一萬五千枚を印刷致し、縣にて指定された禁酒日、禁煙日に會員は高松市丸龜市坂出町の各要處に立つて大に主義宣傳に努めました。

又一方には縣廳を初め市役所、郡役所、町役場、警察所各中等學校、女學校小學校を歴訪しその主任者並に學校長に面會致し、禁酒に對する感想を伺ひ又本會の主義希望を申述べました。丁度勤儉週間の事とて何れの方々にも、非常に喜ばれ自發的に多數を要求される市長學校長も御座いました。丸龜市長大須賀氏は之を市内の勤儉強調委員百餘名に配布されました。

×

綾歌郡々視學川崎氏は熱心なる賛成者にて綾歌郡内各小學校、補習學校、青年會、處女會、在郷軍人會へ添書して同氏から御發送下さいました。そして各學校へは特に職員室と掲示板に貼附するやう申添へられました。私共は神樣の御導きと同氏の御親切を深く感謝致しました。坂出警察署長大利氏から御賛成御同情を頂き宣傳の方法についていろ／＼御親切なる御注意を下され、且つ各駐在處の巡査へは同氏から禁酒のビラを配布せられました。

×

なほ遠方にて訪問致しかねた他の六郡の郡長、郡視學、各中等學校、女學校、小學校(二百三十六)並に各青年團(二百餘)處女會(二百餘)へは宣傳ビラに依頼狀を添へて發送致しました。又紡績會社に横尾工場長を訪ねましたが非常に共鳴せられ近日中にポスター大展覽會を開き禁酒禁煙の部を設くから參考資料を拜借したいなどゝ申されました。

此度教育家官吏實業家の方々の御感想を伺ひ禁酒に對する輿論が年と共に益々大きく盛んになりつゝある事を知り誠に嬉しう存じました。

三支部の會員が心を合せて祈り汗して働き豫想外の効果をおさめ得ました時一層神樣の深いお惠みをさとる事が出來ました。一同は感謝と喜びに滿たされて居ります。

暑さ厳しき折柄何卒御身御大切に遊ばさるやう祈り上げます。

岩瀬　壽子

○第一回高知部會報告

五月七日午後三時より開會、前支部長の祈は聽かれ、昨年六月須崎幡西の二支部誕生茲に第一回部會を開く事を得。讃美歌二百七十三番合唱、島村姉の祈禱、砂川部會長司會者となり部會開會の挨拶及び將來の希望を述べ互に一致協力して我縣下のために盡す可き事を竝び横川部會の性質及び使命を說明し大會に於ける協議事項決議されし諸件に就きて報告をなす。猶部會長の責任を明かにするために

一、部會に屬する支部より本部に報告を送る時は必ず同報告を部會長に送る事

二、各々部は常に連絡を取り互に事業及其發展を助け便宜を計り矯風會の主旨貫徹に勉むる事

三、部會長若しくは代理は必ず年一回各支部を巡回す

四、部會長は各支部の統一を謀り之を補佐する責任あり

以上に就きて語り各支部昨年中活動報告より協議に移る協議事項

一、久布白先生を迎ふるの件、九月中先生を迎ふるに當り旅費の半額は高知支部殘半分は二支部にて負擔す

二、本年奈良に於ける關西部會に出席の件

三、大會決議事項に就き實行方法

四、財務の働及び資金を作る方法

尚本年度の一致運動としては協力拾錢袋に力を注ぐ事

出席代員　砂川部會長、須崎支部長今橋千鶴子姉、幡西支部長代理和倉松枝姉及高知支部幹事及び會員二十八名須崎支部會長今橋姉の祈禱を以て第一回部會終る。

尚我篤志施設所は遂に其働をみとめられ本年度より年三百圓縣より補助許可せらる、感謝に堪へず諸姉の御祈を願ひます。

書記　横川　靜野

編輯室から

◇いづれは矢島先生の傳記が誰かの手によつて一書となつて世に公にされることでせうが、

兎まれ、九月號を以て矢島先生の記念號とすることになりました。あゝいつた、長い、變化曲折の多い公私の生涯を送られた方だけに、可なり多方面に、先生を知つてゐる方々があります。此の號をまとめるにも、ほんとうは一々お宅に伺つてお願ひしなければならなかつたのを書面でお願ひ致しましたに係らず、社會の諸方面の方々が直に原稿なお送り下さつたなどゝいふことは、ほんとうに嬉しいことでした。こゝで厚く御禮を申述べます。

又、會員の方々からも色々の感想が寄せられました。役員の方々でこのために多くの時を割いて下つた方々にも更めて感謝致します。

◇八月の廿五日から仕事が始められます。今年は九月號のためともう一つの大切な理由で、東京にゐましたが　夏の東京はなか〳〵い、と思ひました。殊に夕方の微風に愛撫される感觸は甘ひ難い愉快さです。それが何か面倒な仕事の切りのついた時など尚更です。

◇久布白幹事は、此夏滿鮮の講演旅行なされましたが、その中から遙々露西亞婦人に關する興味深い原稿を寄越されたなど誠に有難い氣持ちで一ぱいになりました。時日の都合で十月號に廻しましたからどうかお待ち下さい。人は眞實に於て心の手を握る、と、さういふ感じさへ抱きました。

守屋幹事の南洋のお話や林副會頭の巡廻記なども十月號にて皆様に！

（エス・エム）

個人消息

◇小崎會頭　九月上旬茅ヶ崎より歸京の豫定。

◇久布白幹事　今夏滿洲朝鮮方面講演旅行中でしたが八月廿五日歸京の豫定です。

◇ガントレット副會頭　八月中旬石川縣地方講演旅行、二十二日歸京。

◇守屋幹事、七月廿六日南洋より歸京、八月中昨年同様上州鹿澤溫泉にて婦人ホームの娘達とキヤンプ生活、月末歸京の豫定。

◇竹腰逢子氏　矢島家にて靜養され居る同氏は此夏も大分に快方に向はれつゝあります。

◇林副會頭　七月中旬から下旬にかけて、中部、關西地方を巡廻されました、いつも乍ら先生はお元氣。

◇千本木道子氏　エヂンバラの世界矯風會大會に出席して歐洲を巡り再び米國へ。巴里では、もと少年禁酒軍でお盡しになつた山下(辻)浪子夫人にお世話になり、シカゴから紐育迄二階堂みよ子姉と旅を共にしましたとも、誠しいおたより。

社告

婦人新報定價

本號一部　三十錢　郵税五厘

半年分　一圓二十錢
一年分　二圓四十錢　郵税共
(但し海外は郵税別)

◇廣告御希望の方へは詳細お知らせ致します。

◇送金は凡て振替が便利でございます。

◇誌代は前金、切手代用は一割増

振替口座東京三二四六九
電話四谷六五六〇番

編輯及事務所婦人矯風會本部

大正十四年九月八日印刷
大正十四年九月十日發行

發行兼印刷人　小崎千代
編輯人　久布白落實
發行所　東京市外大久保百人町三百六十番地　婦人新報社
東京市小石川區久堅町百八
印刷所　株式會社博文館印刷所